MAGNOLIA CAFE ANNUAL REPORT 2022

2022年度　マグノリア・カフェ

年間レポート「MARE」第2集

MAGNOLIA CAFE ANNUAL REPORT 2022

2022 年度　マグノリア・カフェ

年間レポート「MARE」 第 2 集

四国学院大学

まえがき

マグノリア・カフェ運営委員長
ネルソン橋本 ジョシュア諒

「MARE」第 2 集は、2022 年度のマグノリア・カフェの諸活動をまとめたレポートである。四国学院大学のユニークな課外活動の 1 つであるマグノリア・カフェは、学生と教員の〈知〉の活発な交流を促す場である。2022 年度は、11 のマグノリア・カフェが開催され、それぞれ興味深い活動を展開した。本レポートのページをめくれば、きっとクラスルームの中では普段見られない光景が広がる。マグノリア・カフェの 1 つ 1 つの成果を是非お楽しみに。

2 年目に入るマグノリア・カフェには、新しいカフェも加わり、さらに充実した〈学び〉が繰り広げられた。11 のマグノリア・カフェは、近代社会あるいは現代社会に対してさまざまな問いをテーマとして設定し、自主講座やワークショップなどの形態を用いて、知的作業に取り組み、会食を含む、自由な学びの場を提供している。今年度も、コロナ禍により、さまざまな制限はあったが、試行錯誤を重ねて、創造的な探求を続けることができた。

10 月に開かれた本キャンパスでの大学祭では、全カフェが協力して「マグノリア・カフェ ストール」を行った。出店や特別なパフォーマンスなど、大学祭を大いに盛り上げた。2 月には、2 週間の期間「マグノリア・カフェ フォーラム」を開催した。各カフェが、オンライン発表とカフェテリア・コイノスでの展示を行い、1 年の活動について報告した。

本レポートの発行を通して、さらに多くの学生にマグノリア・カフェのことを知ってもらい、この知的共同体の仲間として加わっていただきたい。また、本レポートを通して、地域の方々に向けてマグノリア・カフェの魅力を発信し続けていきたい。最後に、マグノリア・カフェを主催した先生方、参加した学生の皆さん、活動を支えてくださった職員の方々に感謝を申し上げたい。執筆から校正と発行までご協力頂いた皆さんに、改めて謝意を送りたいと思う。

＊マグノリア・カフェの年間レポートの英語表記「Magnolia-cafe Annual Report」のマグノリアの最初の 2 文字と続く頭文字から成る本冊子の名称「MARE」。*MARE*［マーレ］はイタリア語で「海」を意味する。「海」は、私たちにとって馴染み深い、穏やかな瀬戸内海のイメージである。

目次

日韓文化コラボ
…… 1

瀬戸芸 2022 カフェ
…… 5

隣人と自分の命を守る
…… 9

科学の目でものを見る
…… 14

Reflections on Gathering
…… 18

珈琲・ホビー・ハウス 第 2 章 try & error!
…… 22

インプロを生きる。
…… 28

空海カフェ
…… 32

ポストモダン教職カフェ
…… 37

踊ろうぜ
…… 41

おたく♪シンフォニア
…… 45

付録① マグノリア・カフェ ストール（大学祭）報告
…… 49

付録② マグノリア・カフェに関する規程〈一部抜粋〉
…… 51

日韓文化コラボ

担当教員：李 静淑

わたしたちの活動

映画、音楽、ファッション、スポーツなどグローバル化で境界が崩れつつある。韓国ブームにロマンを感じても、その裏側にやはり日本と韓国とは相当違うのだという日本人の伝統的な韓国観が残っているように感じる。

この心理的ミゾを感情的議論にしないために、一定の距離をおいて話そうとすると、かえってお互いの心理的距離が拡大する。双方の信頼関係を築くためには、例え、言い争ってでも話し合い、小さな差異は認め合って、その上で共通の認識を持ち合うことが、結局は心理的距離を縮めることに繋がるであろう。

まず身近な現状を認識し、考察する。距離的に近いことから風習など似ているところもあるが、微妙な違いもある。多少の差異を乗り越えて、大局的な見解を相互に持つことが肝要である。このマグノリア・カフェがささやかでも、お互いの理解に近づくための一歩になることを強く願っている。

日本と韓国は、「近くて遠い国」と言われているのは何故なのか、「近くて近い国」にするには何が必要なのかを考えるためにも、まず、戦前の歴史観から解放され、お互いに独立国同志の尊厳と理解が最優先されなければならない。

しかし、日本では似て非なるものへの嫌悪感と昔の優越感が未だに残っているように思う。そして経済的に対等になった今もお互い自らと区別したい気分があるように感じる。また、韓国は歴史問題を提起し続けるのは「近い」ゆえに自らを日本とは差別化したいところがあるからではないだろうか。

上記を踏まえて、現在の日本と韓国の社会、文化をはじめ、様々な分野を比較しながら、両国の友好な関係づくりを深めるコラボ（コラボレーション）を目指したい。

朝鮮通信使の歩みと本来の目的とは？

朝鮮通信使は、一般的に江戸時代のものをさし、江戸時代以前や日本史の資料内では「信使」や「朝鮮信使」と記述されることが多い。

室町時代に 3 回、江戸時代に 12 回、李氏朝鮮から日本へ派遣された海外使節団のことを意味するが、華やかな衣装を身にまとい、江戸まで練り歩く朝鮮通信使は江戸時代のものだと考えられる。

また、朝鮮通信使が始まったきっかけは、室町時代の彼らは「倭寇」と呼ばれる北九州近海や瀬戸内海近辺を拠点にした海賊の活動を抑えるために派遣された。

それに対し、江戸時代では豊臣秀吉によって行われた文禄・慶長の役と呼ばれる朝鮮侵略によって悪化した友好関係の和解を目的に始まった。

この際、当時の李氏朝鮮国王である「光海君」は、先ほど記述した朝鮮侵略で捕虜にされた朝鮮人の解放を条件として提示しており、その約束が果たされたのは 4 回目の来日であった。

このことから、残りの 8 回の派遣には「通信使」というより「文化使節団」としての色合いが強く、これにより有効な関係を築くことができたのである。

では、なぜ数年前まで戦争をしていた国同士がこ

こまで国交を回復できたのか、それは当時の日本の政治形態が関係している。

江戸時代の日本は鎖国であったため、貿易をしている国は中国とオランダのみであった。またそれも極端に制限され、一般国民が外国の文化に触れる機会は殆どなかった。

朝鮮通信使を歓迎している光景

そのため、朝鮮通信使は国民にとって唯一の国から認められた異文化交流であり、娯楽の一種でもあった。それにより、日本は朝鮮通信使に対して豪華な手料理をふるまいながら、友好な関係を築こうとしていた。

一方で、李氏朝鮮からすると、日本と良好な関係になることで、隣国である清へのけん制ができると考えていた。

なぜなら、同時の李氏朝鮮は、国としての武力が清や日本よりも劣っていたため、清は李氏朝鮮に対して高圧的な態度で接していたが、李氏朝鮮としては他に頼ることができず、清と外交を続けていた。

しかし、豊臣秀吉による朝鮮侵略の際に、清は李氏朝鮮に対しての援軍を少数しか送らず、結果として清は李氏朝鮮からの信頼を失うことになったのである。

上記の状況から、李氏朝鮮は日本と交流を深め、日本から再び侵略されることを防ぐことと、清との貿易や国交で不利になったことが原因で戦争になった場合に、日本の力を借りるためにも朝鮮通信使を通して日本と交流を続けることは重要であった。

李氏朝鮮は儒教を重んじた国であり、武芸よりも文芸の才能があるものが出世できたので、朝鮮通信使になれる人は、国の中でも国王から認められた才能のある人や、国の主催で行われる試験に合格した優秀な人だけであったが、貧しい人や身分の低い人たちも試験を受けることができた。

つまり、身分の低い人たちからすると、朝鮮通信使になることが出世に繋がることでもあったので、命がけの渡航であったにもかかわらず、志願者の数はとても多く、朝鮮通信使はそういった人たちの心の支えでもあり、憧れでもあった。

このように、朝鮮通信使は、両国間にとって多大なメリットがあったため、お互いの文化を認め合うことが可能になり良好な関係を築くことができたのである。

現在の日韓関係はお世辞にも良いとは言えない状況だが、江戸時代のようにお互いの文化を認め、お互いを高めあい、良好な関係を築いていけることを心から願っている。

（文学部 2 年・山村範勝）

なぜ韓国の若者は選挙に行くのか

韓国の若者は、日本以上に厳しい受験競争や就職活動、また高い失業率の中で非常に生きづらい状況にいる。特に、韓国は激しい受験競争を勝ち抜いても、希望した大企業に就職できない「超競争社会」と言われ、近年の若年層の失業率は、全体を大きく上回る10%近くと推移し、慢性的な就職難が社会問題となっている。

また、韓国の若者たちは、給与・福利厚生面で大企業希望が強く、社会的評価が低い中堅・中小企業への就職を忌避する傾向がある。

そのため、大企業や安定した職に就きたいという思いが強く、公務員を目指す学生も年々増加傾向にある。競争率は極めて高く、就職・試験浪人として留年して予備校に通う者や、大学院に進学する者も増えている。

他方、首都ソウルでは、マンションの平均価格が 2 倍近くに上がり、日本円で 1 億円を超えている状況にある。このため、どんなに一生懸命に働いてもマイホームには手が届かないという声が若者たちの間でも上がっている。競争の厳しさ故に所得格差が広がっていることも深刻な社会問題となっている。このような厳しい状況に置かれている若者にとって、政治は自分たちの生活を左右するものであり、「厳しい現状を改善してほしい」という期待も大きいものである。

昨年（2022 年 3 月 9 日）行われた大統領選挙結果をみると、投票率は 77.1％で、年齢別、男女別でも大きな差が生じたが、選挙の要となったのは、若者世代と言われている。つまり、若者の政治への積極的な参加に伴い、選挙全体に占める若者の投票数の割合も大きくなっていることから、若者を意識した政治が支持されるようになってきている。

実際に、大統領選挙で当選したユン・ソギョル大統領は、住宅価格の高騰を抑えるため、住宅 250 万戸の追加供給を掲げたほか、兵役のある男性の票を意識し、兵士の給与引き上げなどを表明していた。

韓国・大統領選でアピールする様子

また、若者を意識した選挙では、政策だけにとどまらず、様々な工夫が施されている点も特徴的である。例えば、候補者自らが歌を披露したり、ダンスを踊ったりと、まるでライブのような雰囲気の中で行われる選挙演説。車でロゴソングをかけながら選挙区をまわったり、集会の会場でダンサーがパフォーマンスを繰り広げたりする。候補者は韓国で広く親しまれている曲の替え歌を披露することで、候補者の名前だけでなく、人柄や政策などもアピールしている。

このように、若者を意識した政治が行われており、また「過酷な今の環境を改善してほしい」という若者たちの願いから、政治への関心が高まっていることが分かった。身近な社会問題から「自分たちが社会を変える」という意識を持って行動する韓国の若者たち。その行動に伴って政治も変化している状況をみると、若者の積極的な行動は社会変革にも繋がることを痛感した。

日本の若者も身近な社会問題に関心を持ち、政治へ積極的に参加し、若者が日本を変えていくという意識を持って選挙に参加していくことを強く望んでいる。　　（社会福祉学部 4 年・林紀花）

BTS 入隊問題の是非を問う

朝鮮戦争（1950～1953 年）以降、朝鮮半島は未だに休戦状態にあるため、有事に備えるために兵役制度が存在している。こうした背景もあり、韓国人男性には職業などに関係なく、兵役の義務が課せられている。

一方で、韓国のアーティストや俳優など社会的に影響力を持つ人々が入隊するかどうかについての議論が以前から行われていたが、最近では、韓国の 7 人組男性ヒップホップグループ「BTS」の最年長メンバーである JIN さん（30 歳）が兵役義務のため陸軍に入隊したことが話題になった。

入隊した JIN さんの姿と見送る様子

韓国の徴兵制度は、満 18 歳の全ての韓国人男性に課せられ、19 歳になる年に兵役判定のための検査を受ける。入隊期間は、最低 18 か月以上(陸軍、海軍、空軍など所属する軍によって異なる)で、兵役逃れを画策した人には厳しい処罰が課せられることになっている。ただし、特別な理由がある場合には、入隊期限の延期が認められている。

2020 年 12 月に韓国国会で兵役法改正案が可決されたことにより、「文化勲章または文化褒章を受けた者で、国威宣揚に顕著な功労があると認めて推薦した者は、30 歳まで延期できる」ようになった。

配属先においては、通常、兵役判定結果に従うようになっており、戦争や危機状態を想定した厳しい軍事訓練とともに、通信、調理、運転、広報、軍事警察、夜間警備など各自の任務を遂行することになるが、配属先によって服務内容と任務は異なっている。特に、「国防広報員の広報支援隊」と「社会服務要員」が芸能人の配属先として多い。

このような現状のなか、今回の BTS の兵役免除に対する議論には大きく 4 つの課題が指摘されていた。

1 つ目は、BTS による経済効果の問題である。BTS の経済効果は、日本円にして約 5 兆円であり、その損失は国にとって大きく影響することが懸念されている。

2 つ目は、兵役力の衰弱化の問題である。韓国国内で進む人口減少と兵役免除の対象拡大が韓国の兵力の衰弱化に繋がるのではないかと懸念されている。

3 つ目は、韓国国内に広がる不公平感の問題である。韓国の国民間では、兵役は義務であるという考えが根強く、若者を中心に不満の声が上がっている。

4 つ目は、男女対立の深刻化の問題である。近年、BTS は女性ファンが多いこともあり、男女の対立が深刻化する可能性があるという指摘の声もある。

今回、BTS の入隊問題に賛否を問われたが、若者の人口が減っている現状を踏まえた上で、今後の兵役システムのあり方について、慎重に検討していくべきであると考える。

（社会福祉学部 4 年・野島未来）

画像の出典

- 「朝鮮通信使の道のり」
  http://www.isobekaikei.jp/pages/841/
- 「韓国大統領に当選したユン氏」
  https://www3.nhk.or.jp/news/
- 「BTS ジンさん・メンバー見送り」
  https://news.yahoo.co.jp/

参考文献

- 嶋村初吉，2021，『朝鮮通信使の道』，東方出版.
- 石平，2019，『朝鮮通信使の真実』，ワック出版社.
- 金成玟, 2016,『戦後韓国と日本文化』岩波書店.

5 号館の演習室にてディスカッション（2022 年 6 月 23 日）

瀬戸芸 2022 カフェ

担当教員：井上 雅義

瀬戸内国際芸術祭　概要

第 5 回瀬戸内国際芸術祭が 2022 年 4 月 14 日から 11 月 6 日まで瀬戸内の島々を舞台に開催され、72 万 3316 人が訪れた。前回 2019 年の 117 万 8484 人から減ったが、パンデミックの渦中で入国制限などの制約を考えると減少幅は限定的だと言える。

前回に続きニューヨークタイムズやナショナルジオグラフィックなど欧米メディアが推奨し、内外の高評価を反映したかたちだ。

小豆島　「ゼロ」ワン・ウェンチー（台湾）　直径 15m のドームは 4000 本の竹を編み込む構造。

クリエイティブ産業としての芸術祭

瀬戸芸 2022 カフェの目的は 2 つある。

（1）クリエイティブ産業への対応力

（2）文化資本を養う

いずれも達成度の測定は難しいが、現代アートに触れる機会を提供することこそカフェの趣旨に適うと考えている。

「クリエイティブ産業」とは何か？

美術やデザイン、建築、映像、演劇、身体表現、メディア（報道・広告）などクリエイティブな能力を必要とする分野を網羅し、欧州の GDP の 7%、8600 億ユーロに上る（注 1）。

1997 年に英国ブレア政権やオーストリア、北欧 5 カ国など欧州で取り組みが始まった。日本でも 2010 年に英国に倣って「クールジャパン」を開始したがアニメなどコンテンツ輸出に留まり従来の「文化産業」の枠を出ていない。つまり、発想の転換がない。

1995 年頃に始まるデジタル化社会は産業構造を中心に歴史的なパラダイムシフトをもたらした。第二次世界大戦後の中流階級の台頭はホワイトカラー（事務職）が担ってきたが、「ホワイトカラーはデジタル化の恩恵を受けない」とフランスの経済学者ダニエル・コーエンは指摘する（注 2）。

コーエンによればデジタル化社会（デジタル資本主義）が必要とする job（職能）は「クリエイティブであり続ける能力だが、創造性を強いられるのは不幸である。芸術家のような創作の苦悩に耐える必要があるのだから」。

GAFAM をはじめ IT 産業は“独創的なアイデア”を競い合っている。たとえば Uber（ウーバー）は白タクのドライバーと消費者を地理情報システム上でマッチングさせるアイデアだけで急成長した企業だ。アプリを開発しただけで何も生産していない。

日本政府が躍起になっている DX（デジタルによる社会変革）はプログラミングなど技術教育に偏っている。クリエイティビティを忘れた DX は失敗するだろう。

「クリエイティブ産業」を担える人材育成が不可欠である。ダニエル・コーエンは「クリエイティブを強いる労働」を批判し経済成長そのものに疑問を投げ掛けているが、日本は批判されるクリエイティブ産業が未発達でスタートラインにさえ至っていない。

ダニエル・コーエンが批判するアメリカでは、新た

な中間層「クリエイティブ・クラス」を提唱するリチャード・フロリダの著書『クリエイティブ資本論（2008）』がベストセラーになった。（注 3）「クリエイティブ・クラスとは、新しいアイデアや技術、コンテンツの創造によって、経済を成長させる機能を担う知識労働者層を指す。」彼らが担う「クリエイティブ経済」は労働人口の 30%を占める（米国）。

マクロ経済からミクロに戻すと、世界各国で活発になっている地方の芸術祭の多くはクリエイティブ産業を視野に入れたものだ。

無数にある“国際芸術祭”のなかでも瀬戸芸の国際的な評価が高いワケも、美術と建築、舞台芸術などジャンルを越えた場を創出しているからだと思う。

実際、開催地の住民や島民にとっても開催の回を重ねるごとに奇抜で奇妙な現代アートを受け入れ、場合によっては積極的に参加する事例が増えている。

もし瀬戸芸がない状態で「奇妙なアート」があちこちに出現したら嫌悪感を抱くだろう。つまり瀬戸芸によって「表現の多様性」に対する許容量が増したことになる。

創造性は、想像力を高めることで養われる。想像力とは異質な要素を結びつけ、比喩（メタファー、メトニミー等）と象徴、類推（連想）の能力である。

瀬戸芸の舞台となった島々では、無意識のうちに想像力を鍛えてきたのではないだろうか。

瀬戸芸カフェは、我田引水かもしれないが、学生に奇抜で奇妙な現代アートに触れる機会を与え、表現の多様性を知り、できれば学生の想像力を高めたいと考えてきた。

3年前、1年生で瀬戸芸カフェに参加した数名の学生が4年生になって瀬戸芸カフェに参加してくれた。そのなかの1名は3年前の瀬戸芸に魅了されて直島の地中美術館でガイドのバイトを経験、卒業後は直島のホテルに就職する。カフェで瀬戸芸を見るまで「現代アートは知らなかった」という。

彼のように芸術祭から直接の影響を受けなくても、「奇抜で奇妙な表現」に触れることで、想像力の刺激になれば良いと思う。

「ツーリズム」の落とし穴

地域の現代アート・フェスティバルは2000年に新潟県で開催された「大地の芸術祭（越後トリエンナーレ）」を皮切りに長野県の「北アルプス国際芸術祭」や「札幌芸術祭」など、各地で活発に開催されている。大地の芸術祭は瀬戸芸と同じく北川フラム氏が総合ディレクターを務めている。

地域活性化策が主要な目的であるため観光に関わる統計が重視されることは自然な流れであり、動員数やインバウンド、そして経済効果が期待されていることも必然だと思う。

地方との格差是正が求められ、産業の分散化、あるいは地方を含めて日本全体の経済を上向かせる意味でも、地域の芸術祭は有望なオプションの一つかも知れない。メディアが瀬戸芸に注目するのも先行事例という面があるだろう。

日経新聞では、2022年10月8日付電子版で「瀬戸内国際芸術祭、西の4島が加わり200作品」という見出しで秋会期の公開作品を5つ星評価する特集を組んだ。日経、朝日、共同通信など主要新聞では瀬戸芸に関係するニュースが増えた。日経新聞の電子版サイトで「瀬戸内国際芸術祭」を検索すると594件がヒットした。

海外から瀬戸芸を訪れる動機は直島の地中美術館や豊島美術館など世界的に著名や安藤忠雄や西沢立衛の建築という既存の「資源」があり、瀬戸内の群島（アーキペラーゴ）という類まれなフォトジェニックな風景との相乗効果にあるだろう。

瀬戸芸はアジアで最も成功した国際芸術祭と捉え

られている。ヨーロッパは地方の小さな町で音楽祭や芸術祭が催されてきた伝統があるが、アジアは未開拓だった。中国でも農村と都市部の格差が拡大していて、地域活性化は喫緊の課題だ。

しかし、芸術祭は観光資源として効率は良くない。期間限定であり、瀬戸芸は3年に1度に限られる。芸術祭は採算性が悪く、瀬戸芸も多くのボランティアと企業の協賛金によって採算がとれている。観光のコンテンツならテーマパークの方が優れている。

大島青松園「Nさんの人生・大島七十年」田島征三

現代アートにとっても「ツーリズム」とは相容れない側面がある。アートは必ずしも「観光客を楽しませる」目的で創られるわけではないからだ。アート作品はエンターテインメント（娯楽）ではない。

たとえば、ハンセン病療養施設がある大島で田島征三は第1回開催から国家権力を痛烈に批判する作品を発表し続けている。強制隔離に加えて優性思想に基づく堕胎や避妊手術の強制などナチズムに匹敵する問題があり、それは国家のあり方を問うものだ。

大島青松園なども観光資源に含める、たとえば「ダークツーリズム」のような考え方は、社会問題を「ツーリズム」という予定調和的な箱庭に押し込めてしまうのではないか。

もともと19世紀に誕生した「ツーリズム」は「travel」が持つ危険や冒険を排除し「場所を見ること＝sight seeing」であり、多くは写真を撮る事が目的になった。「旅行者（travel,苦痛を伴う旅）から観光客（tour,苦痛なく楽しめる）」（ダニエル・J・ブーアスティン『幻影（イメジ）の時代』）（注4）

ブーアスティンの観光批判は、視点をずらすと「旅行の消費財化」であり、さらに言えば「体験を消費する”コト消費”」である。限界効用理論のように消費の効率アップが求められる。

それはクリエイティブな体験と対極にある。ダークツーリズムだけでなく、毒気がない体験はブーアスティンの言う「疑似イベント」あるいはヴァーチャルリアリティ（VR）になってしまう。

「文化資本」と「クリエイティブ・クラス」

リチャード・フロリダが影響を受けたピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』（注5）は階級制度に対する批判である。ある階級が他の階級と区別するために文化的な象徴の差異化を際立たせ、競い合う。これを「象徴闘争」という（闘争≒競争）。それは趣味や振舞いなどに現れ、たとえば音楽でバッハを好むグループと流行歌を好むグループとの差異がグループ（階級）のアイデンティティーとなる。象徴闘争は食事の作法から芸術鑑賞や楽器演奏のスキル、語学力など広い意味での教養の差別化につながる。

これら象徴の獲得は歳月が掛かり、上流階級の“仲間入り”するため「文化資本」を競う。スノッブのようで胡散臭いが、ブルデューは批判を込めて社会構

造を浮き彫りにした。リチャード・フロリダはブルデューの研究を反転させ、クリエイティブ階級（クラス）が経済産業を牽引するという「クリエイティブ・クラス論」を展開している。

「創造性はイノベーションと経済成長の源だ」と、フロリダはダニエル・コーエンと正反対の主張をする。アメリカとフランスとで階級社会、経済政策ともに対照的な特徴を反映しているのかも知れない。

議論は分かれるが、世界では「クリエイティブ」に焦点が当たっている。日本でも”現場”の意識は変わりつつあるのだが、政財界、企業トップの意識が旧態依然としている。

“現場”は、たとえば建築やデザインを媒介にして異分野を統合したり、役所の庁舎を「クリエイティブ」にしたり、国際芸術祭を開催した。丹下健三設計の香川県庁舎（1958）はニューヨークタイムズの「戦後建築25選」に掲載される名作。丹下を起用した経緯は分からないが、関係者の慧眼に驚かされる。

あるプロジェクトに携わるチームが仮に100人いたとして、その中の一人でも独創性を発揮できれば結果を変えるかも知れない。

学生たちには、独創性を発揮する一人になってほしいと切望している。　（井上雅義）

＜瀬戸芸2022カフェの活動記録＞

第1回～第2回　女木島（春会期）
第3回～第4回　2022年5月1日　小豆島（春会期）
第5回　2022年6月1日　井上研究室　ミーティング
第6回　2022年7月9日　724教室　合同カフェ勉強会
第7回～第8回　2022年8月7日　男木島（夏会期）
第9回～第10回　2022年9月3日　小豆島（秋会期）
第11回～第12回　2022年10月8日　男木島（秋会期）
第13回　2023年2月11日　井上研究室　総括会議

小豆島　伊東敏光+広島市立大学芸術学部有志「ダイダラウルトラボウ」

注

1. Robert Punkenhofer, 2010, “A WAY BEYOND CREATIVE INDUSTRIES” FOLIO VERLAG / Austrian Federal Economic Chamber, ADVANTAGE AUSTRIA.
2. ダニエル・コーエンはパリ高等師範学校経済学部長・『ル・モンド』論説委員でトマ・ピケティの師匠。林昌宏訳, 2017,『経済成長という呪い』東洋経済新報社.
3. リチャード・フロリダ著, 井口典夫訳, 2008, 『クリエイティブ資本論』ダイヤモンド社.
4. ダニエル・J・ブーアスティン著, 星野郁美・ 後藤和彦訳, 1964,『幻影（イメジ）の時代』東京創元社.
5. ピエール・ブルデュー著, 石井洋二郎訳, 1990, 『ディスタンクシオン』藤原書店.

参考文献

- パブロ・エルゲラ著, アート＆ソサエティ研究センター SEA 研究会訳, 2015, 『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』フィルムアート社.
- ダニエル・コーエン著, 林昌宏訳, 2009,『迷走する資本主義』新泉社.
- 監修北川フラム／瀬戸内国際芸術祭実行委員会『瀬戸内国際芸術祭 2022 公式ガイドブック』.

自分と隣人の命を守る

担当教員：清水　幸一

現代社会への問いとしての私たちの活動

自然は、我々に大きな恵みを与えるとともに、大きな災いをもたらす存在でもあることは間違いのないことである。

また、我々が文明社会で生活を重ねる中で、重大な原発事故のような、多種多様な人災に巻き込まれる可能性もある。特に、原子力関連の問題も、我々には正しい情報が届かないことも事実である

現代社会に生きる我々は、これからも天災が起きないようにすることはできない。また、人災も絶対に巻き込まれないように操作することもできない。

現代社会で生きる我々にとって、大切なことは、我々一人ひとりが、行政にあらゆるすべて事項を、委ねることなく、また、一方的な情報に惑わせられるのでもなく、また、気付かないうちに人為的に与えられた想定にも、とらわれることなく、主体的にそのときの状況下で最善を尽くすための知識と知恵と行動力が求められるのではないだろうか。

ワークショップでの学び

我々自身が、自分自身で、また仲間と共に自らの命、家族の命、仲間の命、隣人の命を守ることができるために、災害や防災心理についての学習会、また直接的な体験活動（自然体験活動）を通して生きていくためのサバイバルテクニックを修得することが、私たちのマグノリア・カフェでの活動である。

マグノリア・カフェのコンテンツ概略

「体験」と「知識」を結びつけた活動

今日、防災教育などで求められている主体的に行動する態度の前提には、防災に関する基本的な知識を理解していることが必要である。危険予知能力向上を図るために、今年度も行動と知識を結びつけた指導を積み重ねてきた、

例えば、警報などが発令され避難行動に移るにしても、正しい知識に基づいた的確な判断が前提となる。誤った知識に基づいた判断であれば身の危険が増すばかりであり、また知識がないので行動に移せないことも考えられる。

マグノリア・カフェでの研究会では、メンバーに正しい知識を理解させるための工夫として、問題解決学習法を取り入れた。つまり、学生たちに「考えさせる」指導である。自らが自分自身で考えることにより、活動を通して、学ぶことの目標を持ち、そのことが主体的な学びとなって、教えられた知識から発見した知識になり、自身の知識となっていくことを期待した研究会を積み重ねた。

ただ、考えさせるだけでは、不十分な場合もあり、指導者が教示することも必要になる。 当然、指導者が体験学習の過程で、学生たちの考えを補ったり、一般的な知見から裏付けたりすることも必要である。

また体験の後に知識を教えることを大切にした。言い換えれば、知識を教える前に、体験させることは、

学生たちに知識の意味を実感させることにあると考えられる。例えば、今年度の研究会でも、人間には自分にとって都合が悪い情報を無視したり、過小評価したりしてしまう心理的な特性があり、災害時にもこうした心理（バイアス）が働くことを学生たちに伝えたが、説明するだけでは、このような実感や経験がない学生には理解できない。直接的な自然体験活動を通して、この種の心理的特性を経験させることで、指導者が教える防災教育における知識と結びつき、理解されることを期待して、研究会・実践活動を今年度も実施した。（清水幸一）

大学催事野外力検定ブース

参加者の声①「マグノリア・カフェでの学び」

私たちの活動は清水先生の指導の下、愛媛でのサバイバル指導や余島でのカヤック体験、新型コロナについての議論を行ってきた。私がこの活動を通して学んだことは、話を聞くだけではなく、体験や経験をすることでより多くの事を学ぶことが出来たことです。例えば、カヤックを進めたい方向に漕いでも逆波や風、その時の天気によって思うように動かない時があるということ。私たちがカヤックを初めて体験した時、風は少し強く、晴天で海の流れも時折強くなり大変だった。放っておけば流されるし、それに反発しようとしても力がいるし、そして何より先生というスパルタコーチがすぐそこにいたことである。

豪快で行動派である先生のおっしゃることは私には理解のできないことでしたが、そういった経験の中で聞く先生の話はとても説得力のあるものだった。サークルの仲間たちと力を合わせて行動することでとても良い時間を過ごせた。私は人と話すことが苦手でしたがサークルのリーダーに任命され、先生の無茶苦茶な提案を全力で取り組むと、少しずつ苦手だった人との会話に自信が持てるようになった。

今振り返ってみると、サバイバル指導やカヤックの体験等も先生のお誘いがあったからこそだが、それをしようと考え行動したのは自分自身であることが信じられない。人とのコミュニケーションを重要としている介護福祉士の仕事に就くことが夢だから、それに繋げられるような体験ができとても充実した活動だった。

昨年は専門学校への入学もあり参加できない日が多くあり、私自身もっとたくさんの活動をしたかった。今年は卒論や就職活動といった大きな選択が控えているが、最後のサークル活動もできる限り参加し、たくさんの思い出を作りたいと考えている。

（社会福祉学部3年・落合拓海）

無人島でのサバイバル活動

参加者の声②「マグノリア・カフェの活動を通して学んだこと、気づいたこと」

私は、新型コロナウイルスと電力の課題などについて学ぶことができた。新型コロナウイルスについては、第8波の予兆、冬に流行しやすい理由、残り火が再燃する、新たな派生型が流行する、別の変異株が出現する、オミクロン株ワクチン接種が鍵という観点から、自分の意見や考えを表現しながら、他の参加者、先生の意見や考えを聞き、取り入れ、学びを深めることができた。新型コロナウイルスの基本的な対策は、手洗いうがい、マスクの着用、室内の換気だと考える。これらを土台とし、さらにワクチン接種やソーシャルディスタンスの確保、3密（密閉、密集、密接）の回避などがある。まだまだ感染者、死者ともに増加しており油断できない状況のため、引き続き感染対策を徹底していかなければならない。いつか必ず今まで通りの生活ができると信じて頑張っていこう。電力の問題については、電力需給が厳しくなることを、参加者全員で無理のない範囲での節電の例をもとに、自分なりのやり方や意識できることを話し合うことができた。私が実践していることについて発表し、ほかの人の意見を聞いているときに実践できそうなものがあったので、やってみようと考えた。この問題については、自分にとって無理のない範囲で、少しずつ実践することが大切だと考えている。無理な節電をして体調を崩してしまっては本末転倒、元も子もないからである。

その他には、大学祭で野外力検定種目をお客さんに体験してもらうという活動を行った。子どもから大人まで、さまざまな人に体験してもらった。準備は大変だったが、参加者全員で取り組み、当日は滞りなく安全に楽しく実施することができた。たくさんの人でにぎわった。充実した時間を過ごすことができた。

また、私は、参加できなかったが、さまざまなサバイバルに関する体験学習も学外の施設で行われた。私も機会があれば参加したいと思っている。サバイバルに関してのさまざまな活動を通して生きるために必要なことについて深く学ぶことができて、とても良い経験となった。（社会福祉学部3年・岡崎英幸）

大学祭時野外力検定紹介

参加学生の声③「清水マグノリア・カフェでの学び」

私が清水先生のマグノリア・カフェで学び、最も考えを改めたことは自然災害についてである。私は、2022年の12月にカフェでの活動として香川県の防災センターに行き、地震に関する映像を視聴するほか消火体験、暴風体験、火災時の避難体験、地震体験をした。

まず映像体験では、近い将来起こると言われている南海トラフ地震についての内容が印象的で、香川県内でも各地域によって予想される波の高さや、被害の規模についての情報を得ることが出来た。南海トラフのような大きなものでなくても、香川県は他県に比べて地震発生が少なく、私を含めて地震だけでなく自然災害に関してそんなに大きな危機感を抱いていない人が多いのではないかと思う。

自分たちの命に関わるが普段目を背けてしまいが

ちな災害についての内容を、耳からだけでなく目からも捉えたことによって、いつか来る災害のために家に避難グッズを用意したり、自分の住んでいる地域周辺の地震、洪水、土砂災害など、過去の災害データや地形をもとに、予測される被害範囲を落とし込んだ地図を読み込んだり、どれほどの災害に襲われる危険があるのかなど、警戒していかなければいけないなと今一度考えさせられる機会となった。

そもそも私は恥ずかしながら香川県に防災センターと言う施設があることを知らなかった。その為この活動に参加しなければ、最初に挙げた様々な体験を今後も“今の自分には関係ない事だから”と自ら体験しようとわざわざ足を運ぶこともなかっただろうし、今まで通り大小関係なく災害から目を背け、どうせ香川には来ないだろうと他人事のように考えてしまう誤った固定概念のままだった。

このカフェの多種多様な体験のおかげで、今後と言わず今日からの課題として、もしもの時ではなく来るべき時に備えられるように自分なりの防災の対策について考えていかなければならないと改めて目の前の問題と自分自身に向き合うことが出来た。

（文学部2年・長尾瑞保）

参加者の声④「マグノリア・カフェでの体験」

研究会では、コロナについて1人1人の意見を共有し、新聞記事を元に話し合いをすることができ、自分とは違う考え方も知ることが出来て良かったと思う。

小豆島の余島の体験では、初めてカヌーやカヤックをしたが、波に流されたりして上手く島一周するのが難しかったがコツを掴んでスムーズに進むようになり立ち漕ぎも少し出来るようになって、様々なことを習得することが出来た。

愛媛県大洲の野外力検定では、子供たちと触れ合い傘袋ロケットを一緒に作って飛ばしたが、時間が無い中で説明して作って飛ばすのは難しかった。しかし、反省点も生かし午後の部ではもっとスムーズに進行することが出来、子供や親御さんに喜んでもらえることが出来て良かった。

今年度の活動は、演劇の関係もあり、あまり参加することは出来ませんでしたが、色々な体験を一つ一つの活動で身につけることが出来た。

（社会学部2年・村上桃菜）

野外力検定指導

参加者の声⑤「マグノリア・カフェに参加して」

私は今年度、マグノリア・カフェに参加して、とても良かったと思っている。それはマグノリア・カフェでの活動を通して新しい経験を得ることができたからである。私が参加したマグノリア・カフェの活動のなかで最も印象に残っているのは、昨年11月にあった野外力検定の手伝いである。私はこの活動を行うなかで、相手に動作や手順を教えることの難しさを知ることができた。相手と話す際には、相手とコミュニケーションを図りながら、どう言葉にすれば相手に伝わりやすいか、次は何をしなければならないかなど多くのことを考えなければならない。

そのような話すことの難しさをこの活動のなかで学ぶことができた。それと同時に、子どもたちが自分たちで作ったもので楽しそうに遊んでいる様子を見

て、相手と話すことのうれしさ・楽しさを得られた。

普段の活動では、メンバーが持ってきた議題に対して、それぞれの意見を考えるという活動を行っている。私は、この活動のなかで自分がもっているものとは異なる着眼点や考え方を知ることができた。私と育ってきた環境や年齢、学部などが違う人の意見を学ぶことができた。

私はマグノリア・カフェに参加して、先に書いているような活動を行うなかで、自分のコミュニケーション能力が少しだけ向上したように感じられた。私は人と話すことや、人に自分の意見を発表することが得意ではなく、これまで、グループワークや発表の機会を極力避けようとしていた。しかし、誰かと様々なことについて意見を交わしたり、学外の方と関わったりなどするなかで、意見を考える力や人と話す力が少し身についたと思う。

私はこの一年間マグノリア・カフェに参加して、多くの初めてのことを経験できた。そして、これからもマグノリア・カフェに参加して、様々な経験を積みたいと思う。また、残り2年と少しの大学生活をより有意義なものにできるように、様々な方と関わり合いながら、マグノリア・カフェの一つ一つの活動を精一杯楽しみたい。　　（社会福祉学部2年・川嵜紳司）

2022年度マグノリアカフェ 総括コメント＆評価

今年度のカフェ活動も、直接的な自然体験実践で、学びを深めることが困難なクールになった。

ただ、昨年同様、研究会でのコロナ渦の社会を多様な視点で学ぶことで、私たちが社会的な生き物であることとも確信できた。すなわち私たちは生まれながらに、誰かと一緒にいることを、また経験や人生を共有することを強く望んでいることである。

やはり、自然と人との距離を近づけ、その関係性を考えるための自然体験活動教育は、恵みをもたらす自然だけではなく時には災害をもたらす自然と自分との関係性にも目を向けさせていく。

穏やかな、心が落ち着く自然だけでなく災害を引き起こす自然、人間のコントロールができないような自然にも向かい合うような直接的な体験をもって、学びを深化できるようなプログラム開発を、次年度も目指していきたい。

疑問や問いは、体験的な確かめを通して、理屈・概念が追及され、理解が求められてくる。防災学習も、知識の機械的丸暗記においては、理解を欠き、記憶だけに頼ることになってしまう。

結局、防災は人類がこれまで体験してきたことと同じような、野外での遊びなどの自然体験活動、自然のいろいろな現象と共に生きる生活体験・物の不足や不便・暗闇・徒歩等の素朴な体験が災害等の緊急時に役立つことであろう。

学校教育では社会が発展、発達するために、地域の人々が知らない新しいことを教えてきたが、直接的な体験活動では、社会が安定、継続するために地域の人々が知っている当たり前のことを、防災教育として伝え、知らせることも重要であることも付け加えたい。　　（清水幸一）

無人島での食事の準備

科学の目でものを見る

担当教員：鈴木 望

清水 一紘

活動の背景と問い

自然科学はコロナワクチン、SDGs、スマホ、AIなど私達の生活と密接に関わっている。私達は科学技術の利便性を享受する一方、自らその安全性を評価し、判断することを迫られるため、文系・理系に拘らず、科学リテラシーを養うことが必要である。

また、資源の乏しい日本において、未来の科学技術を担う科学者や技術者の養成が必要不可欠である。それにも拘わらず、いわゆる「理科離れ」の問題が叫ばれ、子どもの理科に対する興味・関心を自然の学びに結びつける能力の脆弱性、国民全体の科学技術知識の低下などが問題視されている。本問題のアプローチには、理系の研究者・教育者が一般市民や児童・生徒向けにイベントを実施するものがあるが、これらのイベントの参加者は元々科学への関心が高いと考えられるため、真の問題解決にはならない。

そこで、次の点に着目し、本カフェを実施することにした。すなわち、(1)　科学に苦手意識をもつ学生こそ、自然科学の「問題点」や「難しさ」を経験上よく理解している、(2)　児童・生徒の興味・関心に大きな影響を与えるのは「文系の親」や、文系学部出身者が多い「小学校の教員」であり、自然科学を専門としない学生こそ「理科離れ」の問題を解決する鍵を握っているという点である。また、本カフェでは、「自然科学に対する興味・関心はどの様に生ずるか？あるいは失われるか？」及び、最先端の装置や学術研究に依らず、「身近なものを科学の目で見る一般的な方法とは何か？」を問い、「スイバの性比調査」、「ピタゴラスイッチ作製」、「火起こしの教材開発」、「夜の風景から考える環境問題とSDGs」の活動を実施した。

（鈴木望）

スイバの性比調査

人間の性比は概ね1:1であるが、他の生物に於いては必ずしもその限りではない。例えば、植物のスイバの性比は1:3から1:4ほどと言われている（加藤2005）。本活動では身近な植物から生命の不思議に触れる取り組みとして、スイバを題材とした。学生たちは、野外でスイバの雌雄を識別できるようになるために、植物体のつくりや花の構造を学んだ。その後、2グループに分かれて、大学構内で雌雄を識別した上で草丈を測定した。得られた性比と草丈のデータからなぜその様な結果になったのかについて考察を行った。

（鈴木望）

スイバの雄株・雌株の特徴（野田市2021）。

学生のコメント：私は本活動で初めてスイバという植物を知った。スイバは4号館の南側や喫煙所、図書館の東側など学内の様々なところに生息していた。オスとメスの見分け方を教えてもらい、それぞれの場所で長さを測ったり性比を調べたりした。日の当たり加減などの生息する環境の違いによってオスとメスの比率が異なるということが興味深かった。話を聞くだけでなく、実際に自ら調べてみることで、より理解が深まり、とても楽しい活動であった。

（文学部4年・岡田萌）

ピタゴラスイッチ作製

ピタゴラスイッチはNHKの子供番組である。子供

にもわかりやすく、好奇心や想像力を刺激する人気番組であるが、それぞれの装置にテーマがあり、奥が深い。また、実際に装置を作製する活動は、思い通りに装置を動かすために試行錯誤を要するため、科学の方法に則ったPDCAサイクルを実践するのに適している。本活動では、最初にピタゴラスイッチのDVD（佐藤 2016）を視聴し、装置のコンセプトや、電車の車輪や改札などの技術とピタゴラ装置の繋がりなどについて学んだ。その後、学生が自ら装置を提案し、実際に装置の作製に取り組んだ。（鈴木望）

学生のコメント①：私は本活動で、自分の想像通りに動く装置を作製することの難しさを痛感した。磁石に沿って鉄球が転がる装置や、2段階で倒れるドミノなど、理論上は可能であることは頭で理解していても、それを自分の手で作ろうとするとなかなか上手くいかなかった。科学実験のように条件を揃えて何度も試すことの重要性を強く実感した。しかし、装置が思い通りに動いたり、成功させるコツを自ら発見したときはとても嬉しく、それまでの苦労が報われたように感じた。（文学部4年・井筒雄介）

学生のコメント②：私は今回の活動を通して、初めてピタゴラ装置を科学的視点で見た。改めて番組を観てみるとピタゴラスイッチは、自分にとってはリズム良く動く「すごい装置」だった。しかし、自分たちで実際に作製してみると、理科の授業で学んだ法則が関係していたり、試行錯誤しながらミリ単位の位置調整をする必要があるなど、多くの場面で自然科学と深い関係性があることに気づいた。ピタゴラ装置を作製した後、改めて番組を観てみると、今まで自分の想像力を超えた「すごい装置」だと思っていたものは、「自分たちで作製可能な身近な装置」に変化していた。また、活動後、日常生活で目にする機械ひとつひとつについても、「どの様な仕組みで動いているのだろうか？」と考えたり、観察したりする機会が増えた。（文学部4年・池田良）

学生が作製したピタゴラ装置。動画はQRコードより参照可能。

火起こしの教材開発

小学校では林間学校などのイベントで焚き火や飯盒炊飯を体験する場合がある。こうした野外活動を理科を学ぶ機会と捉え、「焚き火」をテーマに、種々の点火方法、広葉樹と針葉樹の燃え方の違いを体感してもらう小学校の理科教材の開発に取り組んだ。（鈴木望）

学生のコメント：小学校で行われている野外活動の「焚き火」に焦点を当て、小学校理科の教材化を検討した。実験は2種類行い、（1）複数の着火方法と、（2）木材の燃焼時間の材質依存性を調査した。（1）では、マグネシウム棒を用いたファイヤースターター、火打石、まいぎり式火起こし器、ファイヤーピストンを使用した。それぞれの道具で着火成功率に大きな違いがあった。小学校で教材として扱う場合、ファイヤースターターであれば、児童でも着火可能であると思われる。（2）については、薪の代用品として、種々の割り箸を用いて検証した。密度や燃焼時間を比較し、焚き付け用である針葉樹、薪ストーブ等で用いられる

広葉樹の特徴を定量化し、密度や燃焼時間などの数値で捉えることができた。これまで、キャンプでは、根拠なく薪は針葉樹を焚き付けに使い、広葉樹に火をうつすということをしていたが、データにしてみることで、その理由を科学的に理解することができるようになった。今後も科学の目でものをみて、考える力を養っていきたい。　　（文学部4年・内田航瑠）

まいぎりを利用した火起こしの様子（左）と燃焼時間を測定するための装置(右)。

地上のホタルと天空の星から考える SDGs

近年様々なメディアで取り上げてられている SDGs であるが、いったいどのくらいの人がそれを理解しているのだろうか？　SDGs は Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）の略語で、持続可能でよりよい社会の実現を目指す世界共通の目標のことである。その理念は「誰一人取り残さない（leave no one behind）」となっている。2015 年の国連サミットにおいて採択され、2030 年を達成年限とし、17 のゴールと 169 のターゲットから構成されている。本カフェでは、実際に見る・観測するといった体験を通して、環境と SDGs がどのように関連しているかを意識しながら活動を行っている。また、裏テーマとして、圧倒的に自然との触れ合いが少ない今の学生に対して、多くの自然に触れ見聞きすることで得られた感動体験を、また次の世代に引き継いでほしいというテーマも掲げている。

SDGs の 17 の目標。

①　ホタルの観察編

ホタルの観測に向かった先は、ホタルの乱舞で全国でも有数の場所の一つである、徳島県吉野川市美郷の某所に訪問した。そこにはまさに地上の星々の如く、数百、数千のホタルが美しく空を舞っていた。参加した学生全員がこれほど大規模なホタルの乱舞を見たのは初めてらしく、じっくり観察したり、スマホで写真を撮ったりしていたら、予定していた時間を大幅に過ぎてしまった。そのぐらいその景色に感動し、興味を持ってもらえたということは、私にとってもつれてきてよかったと感じた一幕でもあった。その後、参加学生にホタル観察で学んだこと、感じたことを A0 サイズのポスターにまとめてもらい、大学祭でポスター発表を行った。

美郷のホタル（美郷ホタル館）

（清水一紘）

学生のコメント：普段の生活、ましてや街中で過ごしていればホタルを見かけることなどない。そのため、美郷で数えきれないほどのホタルを見て思わず見惚れてしまった。ホタルは暗闇のなか、やわらかな緑色の光を見せ、その美しさに息を呑むほどだった。こうして美郷で数えきれないほどのホタルを見ることができるのも、長い年月をかけて自然環境の保護に取り組んできた方々の信念があってこそであろう。次の世代へとホタルの美しさを引き継いでいくためにも、一人ひとりが環境問題に対する意識を

持つことが重要であると強く感じた。

（文学部3年・長野かれん、社会福祉学部1年・亀井心美、藤田哲）

② 天体の観察編

星空に浮かぶ無数の天体を観測するために、岡山県井原市美星町にある美星天文台に 2 回に分けて訪問した。現場についてまず目に飛び込んでくるのが、星の集まりである天の川であった。参加してくれた多くの学生が、初めて見るということで興味深く見入っていた。その後天文台にある 101cm 望遠鏡や、20cm 望遠鏡等を使用して、星だけでなく、太陽系の惑星、アンドロメダ銀河、球状星団等多くの天体を観測させてもらった。土星に輪があることは、教科書や図鑑といったもので知識として知ってはいるが、実際に望遠鏡を通してそれを見た学生らは大いに盛り上がっていた。また同時に木星とその 4 つの衛星（イオ、エウロパ、ガニメデ、カリスト：ガリレオ衛星）も観ることができた。実はこれら天体は 1600 年代にガリレオ・ガリレイが自身の望遠鏡で初めて見つけたものである。そういった歴史上の重要な発見を追体験できるというのは学生にとっても非常に貴重な体験になったはずである。最後に SDGs に最も関連する美星町の取り組みを紹介する。日本で初めて光害防止条例を施行・実施した町、そして星空の町として非常に有名な町である。美星町の人々の取り組みを事前学習してもらい、実際に美星町にてその取り組み（例えば街灯の仕組み）を見てもらうことで、いかに地域の人が協力・努力して素晴らしい星空という景色を残そうとしているのか知る良い機会になったと感じている。

美星町の星空（美星天文台）

またこれを機に、現在香川県の星空（光害）マップを学生の協力のもと作成する計画である。（清水一紘）

学生のコメント：美星天文台で見た天の川に圧倒された。普段星空なんて意識してみてこなかったけど、こんなにもきれいなものなんだと改めて感じた。星空アプリを駆使することで、見えた星について調べることができ、さらに星や天体に興味が出てきた。実際、土星の輪を望遠鏡で見て、興味がわいていろいろ調べてみると、土星の輪が小さい氷や石ころのようなもので、できていることが分かり、やはり百聞は一見に如かずだと感じた。天文台から帰って、香川でも星を観測しようと空を見上げたが、どんなに晴れていても美星町ほど星が見えなかった。実際にどの明るさの星まで見えるか数日にわたって観測してみた結果、美星町では人間の限界である 6 等星近くの星が見えたのに対し、私の住んでいる場所では、それよりも 2 等級暗い 4 等級程度の星を見つけるのがやっとであった。香川は田舎とはいえ、それでも光害の影響は大きく、いかに美星町の方々が、努力してあの星空を守っているのか改めて感じた。

（文学部 4 年・藤澤健太、3 年・長野かれん、社会福祉学部 1 年・上松恵理、文学部 1 年・加藤唯、藤本鈴子）

参考文献

- 加藤万幸・川上昭吾・加藤淳太郎，2005,「スイバの性比」『愛知教育大学研究報告．自然科学』54，37-45.
- 佐藤雅彦・ユーフラテス, 2016, 「ピタゴラスイッチはこうして生まれる」［DVD］，小学館.
- 野田市，2021,「スイバ」,（2023 年 2 月 8 日取得, https://www.city.noda.chiba.jp/shisei/1016739/1016740/kusakoho/kusazukan/1015479.html）.

Reflections on Gathering

担当教員：福永 健一

ネルソン橋本 ジョシュア諒

活動の理念

コロナ社会以降、人が集まること（gathering）は極端に忌避されてきた。集いの禁忌によって人間が受けたダメージは想像以上に大きく、パンデミックは集まることのかけがえのなさを私たちに痛感させた。しかし一方で、人間の適応能力は凄まじく、集まらないことに慣れてしまった側面も否定できない。人類はこれから、集まりの形態を、集まることをめぐる行動や規範や価値を大きく変化させるだろう。

では、これからの「集まり」のありようを決めるのは誰だろうか。これからの私たちの「集まり」は、まずは私たち自身で、実存的な問題として考え決めなければならないはずだ。このカフェのテーマは、「これからの集まりについて考えること」である。昨年度のカフェ「トポスの未来を考える」では、パンデミック下の「場所」について考えてきた。本年度はそれを批判的に継承し「集まること」について考える。

人間の集まりを社会という。したがって、集まることについては社会学が最も豊富な知見を有している。集まりの形態は多種多様である。それらについて考える知的道具として社会学の知見をたずねながら活動をすすめたい。

とはいえ、これからの集まりを実存的に考えるためには、実際に集まること、あるいは人々の集まりを観察することが欠かせない。皆で集まってのアクティビティや、集まりを観察するための調査など、課外活動を積極的に行いたい。

2022年度活動報告概要

2022年こそはコロナウイルスの猛威が収束し、従来のように集まることができるだろうと期待していたが、感染の拡大は収まらなかった。コロナウイルスに罹患する学生は前年より増加し、筆者も初めて罹患した。そのかわり、重症化のリスクは低減し、新型コロナウイルスは、若い人にとって恐れるに足りぬ身近な疾病になりつつある。とはいえ、「密を避ける」の標語は、いまだ私たちの身体や行動を強烈に規律しており、人々の集まりも、私たちの集まりも、それを意識したものにならざるをえない。これまでの活動は、2月上旬時点で計7回、下記の表の通りである。

これまでの活動記録一覧

日程	活動内容と場所
5月26日	ランチミーティング@偕行社カフェ
7月1日	映画上映会@マグノリア学寮
8月5日	観光地とサウナ巡り@高松市
10月15日	コーンホールゲーム@学祭
10月18日	国際協力団体セカンドハンドによるワークショップ@621教室
11月14日	天体観測@美星天文台
1月28日	豊島スタディーツアー@豊島

第1回目のランチミーティング（2022年5月26日）

ランチミーティングでは、メンバーの顔合わせと顔繋ぎをかねて、食事をしながら本カフェで「集まること」の理念を伝えた。理念は大まかに次の2点である。

第一に、本活動では、会ごとにメンバーを固定、限定せず、会の出入りや参加は各々の自由とした。常連もいれば初めて参加する者もいるという流動的なメンバーシップである。こうする理由は、毎度同じメンバーが集い親密さを深めていくアソシエーション的な集まりよりも、その日限りのメンバーによるエフェメラル（一度きり）な集まりを志向したいからである。そうなれば「コミュ力」が試され、「内輪ノリ」など通用しない。その日限りのメンバーで、みんなで楽しく過ごすにはどうしないといけないかを考えなければならない。

第二に、どのようなイベントを行うか、全く定めてもいなければ、メンバーから何をしたいかなどの意向を聞くこともしない。催しの内容をあらかじめ明確にしてしまうと、それに関心のある同質的な人間しか集まらない。レゲエやヒップホップしか聞かない人こそクラシックのコンサートに連れていきたいし、映画しか見ない人こそ演劇や格闘技など「生の迫力」を経験してほしい。ようするに、関心がない、興味がない、知らない、そんな「食わず嫌い」の世界にこそ飛び込んでいってほしいという考えがあるためだ。

そのような期待を胸いっぱいに活動を開始したものの、春～夏はコロナウイルスの感染拡大により、課外活動と飲食が不可という条件下で会を催さざるをえなかった。以下、簡単に振り返る。

まず、映画鑑賞会として、ルーマニアの政権汚職を明るみにするドキュメンタリー『コレクティブ　国家の嘘』（2021）を鑑賞した。鑑賞しながら「権力は生モノ。いずれ必ず腐るもの」というパンチラインが思い浮かぶほど、政治と権力の腐敗ぶりがまざまざとあぶり出された映画であった。

次に、さぬき市にある奈良時代から続く高温の蒸し風呂「塚原のから風呂」体験会である。意気揚々と向かったものの、コロナ感染拡大による臨時休業であることを現地で知り、急遽、高松市の屋島に新たにできた「やしまーる」の見学と高松市のサウナをめぐる会となった。

天体観測は、清水先生と鈴木先生が主催するカフェ「科学の目でものを見る」と合同開催、というよりも我々が便乗してついて行ったものである。岡山県美星天文台で天文学者清水先生のレクチャーを聞きながら満点の星空を観測したことは、感動したとともに大変勉強になった。

これらの活動以外に、学祭ではゲームの催し、国際協力団体セカンドハンドの職員によるワークショップも行った。また、豊島スタディツアーに関しては、ネルソン先生が後述する。

以上、課外活動や学びを中心に会合を重ねてきた。もちろん、行きたかったこと、やりたかったことは他にたくさんある。できなかったことの方が多い。コロナ禍以後の集まりを考えることはできても、実践することは時期尚早だったのかもしれない。とはいえ、その準備運動ぐらいにはなったのではないか。あとは参加した皆さんが、これから各自で実践してくれることを願う。　（福永健一）

豊島スタディーツアーを振り返る～持続可能な社会づくりを再考～

「無関心こそ暴力。」豊島事件の現場から家浦港フェリーターミナルへ戻るバスで、そう呟いたのは豊島有害産業廃棄物不法投棄事件に対する住民運動を先導してきた石井亨さんだった。

敗戦から15年足らず、原爆投下と空爆による戦争

の生々しい被害の跡と瓦礫の中から日本は〈奇跡〉と称される高度経済成長期に突入し、他の〈先進国〉と肩を並べる生活水準に一気に近づき、活発な消費・生産活動が行われるようになった。しかし、この急速な発展と経済構造の変革に伴い、日常生活から排出されるゴミと工業化がもたらす大量の廃棄物が大きな問題となっていく。1960年から1980年の間で、国内のゴミの総排出量は3500万トン増加し、約5倍となった（環境省 2014）。健康被害や環境汚染など、ゴミ問題は私たちの生活と社会を脅かし、私たちの暮らしを本質的に見つめ直すことを要する。にもかかわらず、2000年頃までゴミの排出量は右肩上がりで増え続けていた。近年、排出量は減少傾向にあるが、真の〈循環型社会〉の実現への道のりは遠い。快適な生活を手に入れた代わり、私たちは何を失ったのか。

1月28日、高松港を出発したフェリーは瀬戸内海の波に揺れながら、豊島の家浦港に到着した。今回のツアーの参加メンバーは学生8名、福永先生、そして私。私以外、豊島を訪れるのは初めてだった。また、今回のツアーのオーガナイザーのNPO法人アーキペラゴの串田えみさんもガイドとして私たちを迎えてくださった。最初に向かった場所は、豊島事件の跡地だった。広い更地にダンプカーやクレーン車が土砂の整備を行っていた。冬の冷たい風が吹く中、案内役の石井亨さんは、離れた斜面を指で指しながら、あそこまでゴミが積み上げられていたと説明した。1970年代から、ある業者が全国から廃棄物の収集を行い始めた。一時期は「ミミズ養殖」の名目の下、香川県からも許可を受け、事業が進められた（石井 2018）。しかし、業者に対しての住民たちの不信感は消えなかった。反対の声を行政に向けたが、無視され、有害廃棄物は増える一方――現場では、ゴミの埋め立てと野焼きが平気で行われていた（最終的に、処理対象廃棄物は91万トン以上に上った）。1990年に兵庫県警の摘発により、ようやく不法投棄が明らかになる。しかし、住民たちの長い闘いは終わらなかった。法的な手段を通して県は責任を最終的には認め、汚染された土地の〈原状回復〉に合意する。しかし、この作業は今も続く。撤去のための国の財政支援の期限である2023年3月末が1つの区切りと言われているが、〈原状回復〉はそう簡単ではない。「豊島事件は、人間が汚したものをきれいにできるのかと私たちに問いかける」、と石井亨さんは言う。2000年以降、SDGsが象徴する〈持続可能〉な社会のあり方が追求されるようになったが、豊島事件は〈循環型社会〉を本気で目指す場合、どれほどの努力と犠牲が伴うのか、私たちに訴えかける。石井亨さんの熱い思いが冬の冷たい風を押し除け、心に染みる。大量消費・生産型社会から循環型社会の転換を本気で考えるのであれば、豊島事件を決して忘れてはいけない、と強く思い知らされた。

豊島事件の跡地（2023年1月28日）

次に向かった場所は、20世紀を代表するキリスト教の伝道者・社会運動家の賀川豊彦（1888～1960）の影響を受けて設立された〈豊島農民福音学校〉の元敷地だった。1920年代の後半から日本各地で農民福音学校の活動が始まり、農村の復興に一翼を担った。農村出身の若者たちを集め、デンマークの国民高等学校の教育哲学と〈立体農業〉を組み合わせて、キリス

ト教精神の基で日本各地の風土にかなった循環農法と農業経営を広める事業だった。賀川の弟子、農業指導者の藤崎盛一（1903〜1998）は長年東京の武蔵野農民福音学校を運営していたが、豊島に移り、1947年に第1回目の農民福音学校が開かれた。1982年の閉校まで、限られた財源とスペースしかなかったにもかかわらず、妻子と共に、多くの若者を受け入れ、共同生活をし、土に触れながら〈立体農業〉の大切さを学び、体験する場を提供した。

豊島農民福音学校の石碑（2023年1月28日）

丘の上にあるその元敷地で、私たちを歓迎してくださったのは、藤崎盛一の息子、藤崎盛清さんだった。盛清さんは、現在は苺を栽培しており、当時の話を伺うことができた。まず目に入ったのは、日本農民福音学校50周年記念の石碑だった。この石碑には、賀川先生の直筆による「愛土愛隣愛神」の〈三愛主義〉の言葉が刻まれている。この3つの愛が、「農村救済の根本精神」である、と賀川は説いた。さらに、当時から使っていたパン釜や賀川が「生命の樹」と称したクルミ科のペカンの実を視察することができた（賀川 1973：3, 130）。都会から離れた瀬戸内海に浮かぶ小さな島で〈循環型〉のいのちの営みが実践されていた痕跡を少し辿ることができた。〈循環型社会〉の先駆けはここにあったと感じたのは、私だけではないと思う。農民福音学校の歩みを記録した本の中で、盛清さんの父は以下の言葉を書き残している。

「（前略）生活技術を豊かにして、儲けなくても、農村生活で人間らしく、楽しく、明るく生き甲斐ある生活ができる、という証しを立てる（中略）生活の立体化を主張する。結論は農民の心構えで、どう生きるべきか、これを深く究明して、各自が一つの大きな信条を持つことが必要（中略）まず神を愛し、人を愛し、土を愛する心が大切である（藤崎 1976：229-230）。」

農民だけではない、私たちも生活を真剣に見つめ直す時が訪れたかもしれない。〈循環型〉や〈持続可能〉のバズワードでは到底捉えきれない、本当の豊かさが、かすかではあるが、豊島の様々な営みから見えてくる。

今回のスタディーツアーは現代ツーリズムを象徴するようなインスタ映えを求める旅ではなく、〈人〉とのリアルな出会いが印象的だった。人と人が出会い、「集まること」（gathering）を通して、多くの学びが得られた――人の活動が生み出すゴミの問題への向き合い方、「人間らしく、楽しく、明るく生き甲斐ある生活」を求めた共同体への可能性など。豊島を案内してくださった一人一人に改めて感謝を申し上げたい。このような集いを通して豊かな時間を過ごせたことに感謝！　（ネルソン橋本ジョシュア諒）

参考文献

- 一般財団法人日本環境衛生センター，2014,「日本の廃棄物処理の歴史と現状」，環境省, (2023 年 2 月 7 日取得, env.go.jp/recycle/circul/venous_industry/ja/history.pdf).
- 石井亨, 2018,『もう「ゴミの島」と言わせない』藤原書店.
- 賀川豊彦全集刊行会編, 1973,『賀川豊彦全集 第 12 巻』キリスト新聞社.
- 藤崎盛一, 1976,『農民教育五十年』豊島農民福音学校出版部.

珈琲・ホビー・ハウス　第２章　try ＆ error!

担当教員：山中 雅大

「学ぶこと」と「遊ぶこと」の概観

アメリカの社会学・教育政策学者のマーチン・トロウ（1976）が高等教育における性格変化を進学率の変化から考察してから、約 50 年が経過している。トロウ（1976）は高等教育への進学率が 15%を超えると、高等教育は「エリート段階」から「マス段階」へと変化し、高等教育の主要機能はエリート・支配階級の精神や性格形成から専門分化したエリート養成や社会の指導者層への育成へと変わると指摘した。さらに、進学率が 50%を超えると「ユニバーサル・アクセス段階」に移行し、同様の高等教育の主要機能は産業社会に適応しうる全国民の育成へと変わると分析した。日本の進学率について、文部科学省の「学校基本調査」によれば 1960 年代前半には 15%を超え、2022 年度の大学進学率は過去最高の 56.6%を推移している。これは、既にトロウ（1976）が指摘した「ユニバーサル・アクセス段階」に日本が移行していることを示している。

このような進学率の推移の中、日本では 1970 年代頃から大学が「レジャーランド化」や「就職予備校」と化していると指摘され始めた。つまり、入学と同時に勉強をやめ、遊び惚ける学生が問題視されるようになり、また、大学は単なる就職に有利な資格や技能を習得するだけの場になっているといった状況が揶揄され始めたのである。精神科医の小此木啓吾が青年期の社会的性格として「モラトリアム人間」（1978）と否定的に論じたのもこの頃である。つまり、社会的風潮として学生の学びへの「まなざし」や社会の規範に、「勤勉は善」「遊びは悪」という実利主義思想が蔓延していたと推察できる。

しかし、このような社会的風潮とは裏腹に「遊び」や「娯楽」を肯定的に捉える向きも存在した。オランダの歴史研究者であるヨハン・ホイジンガ（1963）は、人間の文化は遊びのなかで、遊びとして発生し、発展してきたと述べ、人間は本来遊ぶ存在であるといった見方から人間を「ホモ・ルーデンス（遊ぶヒト）」と位置付けた。また、前述の 1970 年代の日本の大学や大学生の状況について、社会学者の副田義也（1977）は当時の学園漫画の分析を通して「時間の浪費の制度化」と表現し、若者が時間を浪費できる大学という制度があるからこそ、若者の失業問題も犯罪も少なく社会は安定すると肯定的に捉えた。「遊び」や「娯楽」の研究として、海外の大学において「レジャー・スタディーズ」という学問や学部が創設され始めるのもこの頃である。

「遊び」や「娯楽」への研究がなされ、それまでの「役に立つ娯楽」といった「余暇善用論」への批判が説かれるが、日本社会では合理的余暇の探求を「レクリエーション」として推奨・推進され、「役に立たない娯楽」は「大衆文化・大衆娯楽」として低級文化と捉えられ、批判の対象になることは変わらなかった。それどころか、日本は 1970 年代、「エコノミックアニマル」と他国から揶揄されるほどに、勤勉神話を貫いた。

しかし、バブルが崩壊するとそれまで以上に厳しい「労働観」や「労働環境」に捉われ、実利主義思想ばかりが際立った。こと、大学においてはカリキュラムの引き締めがなされ、より計画的な教育方針が打ち出されるようになった。2002 年に私立大学連盟が実施した調査（2003）によれば、当時の大学生の生活や大学進学の目的はまだ学歴重視や、サークル、アルバイトを重視する学生が多かったことを明らかにし

ている。また、教育社会学者の武内清ら（2005）が2003年に実施した調査によれば、当時の学生像の特徴が「勉強志向」「まじめ志向」「資格志向」の方向へ向かいつつあることを明らかにしている。その調査を踏まえ、武内ら（2005）は「大学生が『まじめ』になったともいえるし、『生徒化』しているともいえる。『生徒化』とは、大人に従順で、自主性が乏しく、与えられた目標を素直に受容する性向であり、教育重視の最近の大学の『学校化』現象もその背景にある（p.18）」と指摘している。トロウ（1976）が示した「ユニバーサル・アクセス段階」ゆえの変化ともとれるが、何よりも「レジャー」を排除することで「まじめ」に「就職予備校的大学生活を営む傾向は善」といった「余暇善用論」の現代性が当時の学生の特徴から伺える。さて、それから約20年経過した、今の学生の特徴はいかように変化したのだろうか……。

「レジャー」と「まじめ」さは対置的で相対的な価値や行為に捉えられがちだが、そうではない。日本において「レジャー」は「余暇」とも訳されるが、「レジャー」の語源はラテン語の「リセーレ(licère)」に由来し、本来は仕事に従属しない独立したものとして「自由であること」を意味した。「リセーレ」に対応するギリシャ語は英語の「スクール（school）」の語源の「スコレー（σχολή）」である。つまり、自由にすることの中心には仕事とは直接関係のない、「純粋な好奇心に基づいて学び考えること」があったと言える。つまり、「レジャー」とは極めて「まじめ」な探究心や追究心を基にした学習なのである。

カフェ活動の理念と２年目の概要

本カフェでは、「娯楽（レジャー）」本来の意味である、「純粋な好奇心に基づいて学び考えること」を理念に、学生自らが積極的に主体性をもって活動することを主眼としている。特に、学生自身の興味関心の追究であれば、何をテーマにしても「学習」と位置づけ、自発的な活動を受容し主体とした。よって、本学の学生に限らず、誰もが携わり愛好するであろう「趣味（ホビー）」を活動の中心に据えた。

マスプロ教育に代表されるような座学や単なる映像の視聴学習は避け、自分自身の興味関心を他者に説得的に理解させ共有できるように、企画書の作成・立案、審議、プレゼンテーション、ディスカッション、そして効果測定（振り返り）のための評価シートの記入を基本的方針とした。つまり、課外活動でありながらもアクティブラーニングを根幹としているために、教員自らが「お膳立て」するような方針と実施はせず、教員の能動的関与度を下げることで学生の主体性と積極性を促し養成した。つまり、本カフェは武内ら（2005）が指摘した「生徒化する学生」の原点回帰を追求するがゆえに、従順さを排除し、自主性や主体性を根幹に据え、目標設定すらも自分たち自身で実施させるといった、極めて「まじめなレジャー」を学生に周知し参加の条件とした。その結果、2023年2月上旬時点の 2022 年度の本カフェに関与した学生は41人に上り、20企画が今までに立案され、34回の活動を実施した。単純な報告書レベルの「活動時間」だけの集計ならば、約150時間もの活動を行った。

上述の方針により、カフェの活動は、報告書に掲載される内容および日時のみに限らない。企画書の作成・立案や審議では、何度もブラッシュアップや建設的な批判が繰り返された末に、やっと「活動」に至る。苦心惨憺した企画書提出後のさらなる採用有無を中心に「活動」の有無が決まるため、「企画者」の根気や労力、入念な準備と多角的検討、自分自身の興味関心に掛ける熱量や達成力が問われる。また、「参加者」の関与意欲、建設的な批判力、積極性、共同性、カフェのメンバーであることの当事者意識により、企画の充実化が図られる。つまり、どちらが欠けても本カ

フェの活動は活発化せず、そもそも実施もされず、成立しないことを意味する。2022 年度 2 年目の活動は、2021 年度の活動の課題を踏まえ「学問的要素や知見を加えることを念頭」に置き、学生に周知させた。

これらの対策や方針を展開したが、やはり今年度も課題が多く散見された。まず、「純粋な好奇心」に基づく、学習的な探究や追究をしたものの、まだまだ「生徒」感が払拭できず、サポートや援助、顧問として能動的関与度を下げることを前提としていた担当教員の関与も、大幅な援助や関与を必要とした……。

また、昨年度の課題を踏まえ、学生の関与度の向上を図るため一定の条件を課したものの、昨年度同様に学生の関与度合いや意欲において、責任の分散が発生していた。「個々が個々にここで（本カフェで）個々の活動をしているだけ」といった「島宇宙化」（宮台 1994）に陥らないようにと苦言を呈したものの、自主性・主体性が乏しく、協同意識も浅薄で、受動的で積極性に欠け、かつ「楽しいことだけ」を求め「やりたいことしかしない」という「いいとこ取り『生徒』」も多く散見し、また、自主性・主体性が乏しく、協同意識も浅薄で、受動的で積極性に欠ける傾向が見受けられた。結果として、約半数の学生は離反していった。

それでも、多くの課題や反省点を包括しながらも、2022 年度の本カフェの活動も、学生たちにとって実りの多いものだったようである。「たこつぼ」的になりがちな「趣味」や「娯楽」をいかに、客観的に、そして協同的に、時に反駁・批判をし合いながら共有し追究するかは、旧来の「コーヒーハウス」に見るような公共的議論の場となることが望ましい。また、価値観や嗜好の異なる者同士による「文化」の混淆は、文化的オムニボア（雑食）の実践ともなる。その点において、マグノリア・カフェという制度は、とても学生にとって有意義な教育機会だと言えよう。

本カフェの活動実態や意義、評価そのものについては以下の学生のアンケート結果を参照されたい。

（山中雅大）

1/29 **イオンシネマ綾川にて「すずめの戸締まり」視聴**

カフェ企画に関するアンケート結果

本レポートの執筆にあたり、所属する学生に Google フォームを用いてアンケートを実施した。質問項目は、以下の 3 項目である。**①これまでの活動で最も印象に残っている企画、②印象に残った理由、③カフェに入って良かったこと**、以下より各学生の回答を示す。

①新海誠シリーズ ②作品自体も好きであり、互いに異なる感想や意見の交換ができて興味深かったため。③想像力が豊かになったこと。（福田菜々花）

①ウテナ視聴会 ②アニメを考えながら視聴できたりその後の話し合いで他の人の意見を聞けたりすることによって、共有し合える機会が得られたから。③多くの人と触れ合えたり、今まで未経験だったことを経験できたりするようになったから。（三浦花）

①一発芸 ②初参加であったから。③話せる友人が多くできたこと。（林野光将）

①一発芸 ②自分で考えて何かを披露するというのが意外と楽しかったことと、他の人の一発芸を見て新しい一面を見ることができて面白かったなぁと感じたため。③友達が増えたこと。タテの繋がりができたこと。

（長尾圭祐）

①修学旅行リベンジ ②企画者として行ったことや、今年度初めての泊まり企画だった為とても楽しかったか

ら。後輩と一緒に企画を作るにあたって、1 人ではないことに苦労もしたが、その分支えられた部分も大きくあったと思う。今回、PDCA サイクルというマネジメントの品質向上の為の考え方を取り入れ、その都度企画者と先生で話し合いを行った。改善点も見受けられたが、その点に関しては今後の課題にしていきたいと思う。③カフェに入って良かったのは、学年や性別に関わらず、様々な関係を持つことができたことだと思う。このカフェのメンバーは、特に個性が強く様々な価値観を持っている人たちがいる。その人たちの意見を聞いて、普段とは違う意見を知れたり、新しい知見を得たりしたことは本当に良い経験になっていると思う。　（大野亜里沙）

①**一発芸** ②とても楽しかったから。③個性豊かなメンバーに出会えたこと。　（溝渕愛菜）

①**クリスマス** ②自分が初めて参加した企画だったから。③皆さんと出会えたこと。　（泉谷智明）

12/10 **修学旅行リベンジ、愛媛県「南楽園」にて**

①**修学旅行リベンジ** ②泊まったということもあり、より長い時間を他の人と一つの企画で触れ合えたから。③このカフェでは、自分の知らなかったことを体験的に知ることができること。　（依光駿人）

①**一発芸** ②自分が初めて企画をしたからという理由と、皆の披露が面白かったから。③カフェでは普段の大学生活で関わることのない人と関わりを持てるようになること。　（建部孝明）

①**「白蛇」視聴会** ②観たことのない映画を視聴することによって、作品自体を楽しむことができ、その視聴を通して中国民話を知ることができたから。さらに、その後にあった大学祭の話し合いの企画者でもあったから。③様々な年代・思想の人たちとのコミュニケーションを取ることによって、マーク・グラノヴェッター（1973＝2006）が提唱する「弱い繋がり」を得ることができたこと。　（豊嶋竜也）

①**一発芸** ②メンバーの個性が見えたから。③皆優しいこと。　（小川優太）

①**クリスマス** ②プレゼント交換が楽しかったから。③普段観ない作品を観たり普段自分ではやらない経験をしたりできて気分転換になること。　（島健太）

12/23 **アトリウム・コイノスで行ったクリスマス**

①**一発芸** ②暇をもて余した先生の遊びが面白かったから。③研究室がゆるりとしていて面白いこと。

（安藤太一）

①**一発芸** ②それぞれ個性があって面白かったし楽しかったから！③一緒にいて楽しい人たちと出会えたこと！　（村上千宥理）

①**修学旅行リベンジ** ②一番拘束時間が長かったから。③様々な人に出会えて、交流して、意見を言い合える。先輩後輩の壁は無くて、先生ともフランクにいつでも相談ができる(時々？いつも？怒られていますが)。優しいだけではなくて、時に厳しさもある。良くも悪くもこの環境が私自身のモチベーションを左右する大切な場所になっている。　（谷澤舞衣）

①**一発芸** ②みんなの一発芸のクオリティーに驚いたから。③このカフェ（研究室）では筋トレが週に 3 回出来ること。同じことに興味を持つ人に出会えたこと。　（森本凌丞）

10/26「余命 10 年」鑑賞会でのディスカッション

①**クリスマス** ②様々なことができたから。③顔馴染みが増えたこと。（米谷聡馬）

①**一発芸** ②年末の締めとして非常に楽しかったから。③友人や先輩、先生に出会えたこと。そして、多くのことをカフェで学んだこと。（井上未結）

①**一発芸** ②みんなの一発芸が輝いていたから。③筋トレ仲間ができたこと。（前田悠佑）

①**ウテナ視聴会** ②初めて参加した企画だから。③仲良くできる人たちが増えたこと。（岩佐春奈）

①**一発芸** ②みんなの強い個性が表れていて面白かったし、私自身楽しかったから。③カフェの仕事に少しだが携わることで、自分に今足りないと思うことやもっと成長できるところが分かったこと。（兼近知里）

7/6「秒速 5 センチ」視聴会での山中によるミニ講義

引用参考文献

・小此木啓吾, 1978,『モラトリアム人間の時代』中公叢書.

・Granovetter, Mark, 1973,"The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology*, 78(6);1360-1380.（大岡栄美訳, 2006,「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳,『リーディングス　ネットワーク論－家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房.）

・副田義也, 1977,『遊びの社会学』日本工業新聞社.

・武内清編, 2005,『大学とキャンパスライフ』上智大学出版.

・日本私立大学連盟学生生活委員会編, 2003,『私立大学学生生活白書』日本私立大学連盟.

・マーチン・トロウ著,天野郁夫,喜多村和之訳, 1976,『高学歴社会の大学――エリートからマスへ』東京大学出版会.

・宮台真司, 1994,『制服少女たちの選択』講談社.

・文部科学省, 1948-2022,「学校基本調査」.

・ヨハン・ホイジンガ著,高橋英夫訳, 1963,『ホモ・ルーデンス』中央公論社.

・渡辺潤編, 2015,『レジャー・スタディーズ』世界思想社.

「珈琲・ホビー・ハウス２」カフェレポート編集班

編集長：島　健太

校正・校閲：豊嶋　竜也

編集：依光　駿人

表作成：森本　凌丞

加筆修正：山中　雅大

Special Thanks：熟読してくれた「あなた」❤

2022年度　珈琲・ホビー・ハウス2　活動カレンダー

月日	企画者	企画名（略称）	参加人数
4月20日	山中	珈琲・ホビー・ハウス２の運営方法等について（カフェ説明会）	13
5月14日	大野	「役割」、決め(という名目で飯食おうぜ!)会議(仮)（「役割」決め：春学期）	11
5月18日～6月15日（計7回）	川添・山中	【シリーズ企画】「少女革命ウテナ」上映会 ～現代のジェンダー問題を考える～（ウテナ視聴会）	4～7
6月19日	豊嶋・松岡	第2回大学祭出店内容座談会（大学祭打合せ）	8
7月6日	山中	「どれほどの速さで生きれば、きみにまた会えるのか。」における“女々しさ”の男性性を考えてみようぜ!（「秒速5センチ」視聴会）	16
	川添・山中	【シリーズ企画】「少女革命ウテナ」上映会 ～現代のジェンダー問題を考える～（ウテナ視聴会）	16
7月9日	井上先生・大野・山中	【瀬戸芸カフェ×ホビーカフェ】一緒に行こうよ!瀬戸内国際芸術祭! ～大島訪問から体験的に考えるハンセン病とアートツーリズム～（合同カフェ）	5
7月25日	森本・依光・小川	大学祭出店試食会（試食会）	8
9月3日	大野	「役割」、決め会議 ～食欲の秋編～（「役割」決め：秋学期）	9
	谷澤	「白蛇 ～縁起～」における異種族への考察（「白蛇」視聴会）	9
	豊嶋	第3回(展示班)チキチキ大学祭出店内容座談会（大学祭打合せ）	14
10月7日	松岡・山中	大学祭出店特訓大会！ ～食わしてみて飛ばすためのその1～（大学祭特訓大会）	15
10月14日	山中	大学祭のための費用 part～今年も、せめて飯ぐらい予算で食ったらぁぁぁあああ!!!!～（大学祭飯テロ！）	21
10月14日	松岡・山中	鬼畜の大学祭準備（大学祭：準備）	21
10月15日	松岡・山中	ストール!大学祭!!本番!!!!（大学祭：当日）	11
10月26日	岩佐・大野	あなたがもし「余命 10 年」と知ったら？ ～「死」と「生きる」について考える～（「余命10年」鑑賞会）	16
11月28日	大野	「役割」、決め会議 ～冬越えの準備編～（「役割」決め：冬学期）	17
12月10～11日	岩佐・大野	いざ参らん！四国の秘境！ ～「あの日」見るはずだった「心の旅」を僕達はまだ知らない～（修学旅行リベンジ）	10
12月13日	前田	みんなでイオンにいこうぜ！綾川の巻（モール探索）※度重なる審議の結果ボツ企画	×
12月23日	谷澤・大野	お楽しみは授業の後に…… ～一足早いクリスマスゲットだぜ!!!～（クリスマス）	20
	建部・山中	カフェの皆さんのおかげでした！！年末大忘年会！(一発芸)	19
1月上旬～下旬	大野・福田	カフェフォーラムの動画作成（活動報告動画作成）	11
	兼近	カフェフォーラムの展示作成（新聞作成）	7
	村上	カフェフォーラムの展示作成（参加型小物展示作成）	8
1月17日～27日（計3回）	谷澤・建部・山中	【シリーズ企画】新海誠作品で“超・温故知新”……なりッ！！！！（新海誠シリーズ）	13～16
1月19日～2月10日	島・豊嶋・依光	カフェレポートの作成（レポート）	21
1月29日	谷澤・建部・山中	【シリーズ企画】新海誠作品で“超・温故知新”……なりッ！！！！（新海誠シリーズ）	16
2月21・22日予定	山中・大野	反逆のバレンタイン！！！！！ ～お前ら、しっかりお礼をせんかい & かかってこいや！～（バレンタイン）	未定
2月23日予定	森本・山中（片山先生）	「一日一斉おもてなし遍路道ウォーク」に参加しようよ！（お遍路）	未定
3月初旬予定	前田・筋肉軍団	健全なる精神は健全なる肉体に宿る！山中研筋トレDAY！（筋トレ）	未定
3月中旬予定	井上・村上・建部・山中	ハピネス山中感謝祭！！ ～感謝感激雨嵐の会～（運動会）	未定

※ 2023年2月上旬時点において、2022年度の本カフェの活動は、計20企画、34回、延べ401人の参加人数となった

インプロを生きる。

担当教員：仙石 桂子

わたしたちの活動

インプロ（即興演劇のこと。以下、インプロと言う。）の理論家であるキース・ジョンストンは、インプロの理論家になる前は劇作家であった。インプロのゲームなどは、小難しい、調和できないアーティストたちをまとめるために 始めたものである。私自身、18 年ほどインプロを学び、ワークショップやショーを行ってきた。ただ、昨今の自己啓発的になりがちなインプロを見ていると、いつまでも自分の中にインプロへの好意的な気持ちだけにはなれないものがある。ただし、インプロの中のストーリーテリング、そして台本を創る際にもインプロの理論はとても有効的である。

また、筆者が台本の芝居をするメンバーはほとんどがインプロをやっているメンバーである。その際に、インプロをしているからこその台本芝居の中での俳優としての能力の向上につながり、様々な役ができるようになるのではないかと考えており、稽古中や本番中に何があっても適応でき、本人主体で芝居を創ることができることができていると感じている。

ここで筆者の専門のインプロの説明を行う。絹川（2002）は、インプロの定義を「インプロとは、既成概念にとらわれないで、その場の状況・相手にすばやく柔軟に反応し、今の瞬間を活き活きと生きながら、仲間と共通のストーリーをつくっていく能力のこと」であると述べている。また、ヴァイオラ・スポーリン（2005）はインプロについて「誰でも演じることができ、即興演劇は、（才能ある生徒）と同様に（平均的な生徒）にも教えることができる、直感的知識に到達するための手段である」と述べている。つまり、「インプロ」とはその場の状況・相手にすばやく柔軟に反応し、仲間と共通のストーリーが作れるようになることであり、直観的知識に到達するための手段であると言える。

活動報告

マグノリア・カフェ『インプロをいきる』の活動は、春学期・秋学期・冬学期ともに水曜日の19時～20時半でダンススタジオやプレイルームで行われた。その時ごとに、大学祭に出演するメンバーや、丸亀市のにじいろカフェ（丸亀市の行う認知症カフェ）に出演するメンバー、全体でインプロの理論を学び、その後、ストーリーの作り方を学び、ショーイングとしてどう見せるかの練習を行った。今年度は私も参加者も別の活動が多く、昨年度ほど稽古ができなかったが、その都度新たな見せ方を学んだ。

アイスブレイクでは全体や、2人から3人組に分かれて連想ゲームを行い、その後、2人から3人組でインプロにおけるCROWを考える。CROWとは、インプロのストーリーを作る上の基本であり、プラットフォームの部分で、「C」はキャラクター・登場人物（character）、「R」は関係性（relationship）登場人物同士がどのような関係かということ、「O」は目的（objective）登場人物が何をしていて、これから何をしようとしているかということ、「W」は場所（Where）、ここがどのような場所であるかということ、という4点を表す要素の頭文字である。このCROWがインプロのシーンを作る上でしっかり決まっていると、そのシーンは成功する確率が高いと言われている。高尾（2012）は、プラットフォームについて以下のように述べている。

「プラットフォームではゆっくりと時間を使います。何も起きなくても、お客さんは不満を感じるこ

となく見ています。舞台に上がると、とたんに何か言わなきゃ、何かしなきゃと焦ってしまいますが、急いで何かを言ったりしたりする必要はありません。舞台上は客席よりも時間が速く流れていますので焦ってしまいがちです。しかし、もし冒頭の部分で焦っていろんなことを言ったりやったりしてしまうと、安定したところができません。」

CROWのあとにTILTという物語の「傾き」も決めてシーンを作成することにした。この際高尾（2012）はTILTについて以下のように述べている。

「美術が色の芸術で、音楽が音の芸術だとすると、演劇は関係の芸術といえると思います。人は関係が変わるのを見るために演劇を観るものだともいえます。（中略）プラットフォームでは、お客さんはゆっくりと見てくれています。そして、見ながらそろそろ何かが起きるだろうと思っています。そして何か起こるかと予測をしています。演劇は安定と変化からできています。ゆっくり丁寧に安定をつくったら、ここで何か変化を起こす必要があります。そして、変化が終わるとまたそこで安定して、しばらくしてからまた変化して、というふうにしてドラマは進んでいきます。安定したのをしばらく見て、それが変化をするのを見るのが、私たちはものすごく好きです。だから、人はドラマを二時間も三時間も観ることができます。」

インプロのストーリーの作り方の基本である、CROWとTILTを徐々にストーリーの中にいれていき、最後に終わりを見つけることを基本的な練習の構造にした。毎回ペアを変え、様々な人と学年を越えてシーンをしてみる。相手を陥れたり、相手に怒ったり、相手の言葉に反応して泣いたり笑ったりしながら、相手の動き、セリフを見て、「いまここ」に何が必要で、どんな風にこの相手と遊べるのか、を模索していく。そして、シーンが終わったあとには必ず二人で振り返る。自分の「つもり」と相手の「つもり」の違い、そして、こういうことがあったらもっと興味深くなったかもしれない、など、シーンを行った後の対話こそ、インプロの醍醐味とも言える。

今までの高校演劇の中で、「即興」に苦手意識をもつ学生はとても多い。それがどうしてなのかと言えば、ただ即興で芝居をしろ、ということほど怖いことはないからである。そこで、このCROW、TILTを学ぶ必要性は、みんながストーリーを作る上での共通認識があることによる安定と、「自由すぎないことの自由」を体験できると考えられる。インプロのシーンを作る中の「自由すぎることの不自由」について、高尾（2012）は以下のように述べている。

「オスカー・ワイルド（注1）は『自由は創造性の敵』と言っていたそうです。自由になんでもやっていいとなると、逆に何をやっていいかわからなくなって不自由になる。でも、ある制約が与えられると、その中で何ができるだろうと、かえっていろんな発想が浮かんできたりする。その意味ではインプロのゲームは創造のための制約です。」

考察

今年度のマグノリア・カフェは、他の公演の忙しさによりなかなか活動できなかった。その中でも大学祭・にじいろカフェでの活動は大きかった。大学祭ではフラッシュモブのような活動を行った。また、にじいろカフェでは、認知症に関心のある人や、認知症が気になる人、認知症の人と家族、専門職の人などと話をして、その後演劇を使い、表現活動を行うことで、学生にとっても参加者にとっても相互に癒し合い、学び合いが見られた。このことは、「インプロ」の考え方である「相手によい時間を与える」ということを

実感できる良い機会になったと考える。

インプロのゲーム「現在と過去」の稽古をしている様子

学生からの言葉

仙石先生のにじいろカフェに何度か参加しています。参加して一番感じたことは地域によって参加者の雰囲気が全然違うことです。みんなが積極的に話すことが得意な地域もあれば、自分で考えを深めることが得意な地域もありました。授業外で高齢者と話すことはあまりありません。そのため最初のころはどう接していいのかわからず戸惑っていました。そんな時行ったさぬき広島での体験が勉強になりました。広島は人口が少なく、平均年齢の高い島です。仙石先生も広島は初めてと言われていて、どんな雰囲気かわからずドキドキしていました。実際ワークショップをしてみると参加者たちがとても積極的で話も沢山してくださいました。そのため最後まで楽しく過ごせました。なんでこんなにも双方楽しくできたのかと考えた際、広島での参加者たちは人の意見を否定せず、どんなに自分と違う意見でも受け止めていました。ファシリテーター一人だけではなく周りの人も受け止める姿勢を見せればこんなにも雰囲気が変わるのだとわかるとても良い体験でした。

（社会福祉学部 2 年・堤晴香）

私はマグノリアカフェの学生シーソーズの活動でにじいろカフェに参加し、お年寄りの方とワークショップをしたりインプロショーの発表に挑戦したりしました。まず、ワークショップですが一緒に班になった皆様はとても優しく、私自身も一緒にワークショップを楽しむ事が出来ました。次にインプロショーの発表ですが、私にとってお客さんの前でインプロショーを発表するのは初めての事で、とても緊張しました。しかし発表が終わった後、面白かったよ、と声をかけて頂き、まだまだ未熟ではあるものの、お客さんを楽しませる事が出来て良かったと達成感を感じる事が出来ました。このにじいろカフェでは貴重な体験が出来たと思います。今回の活動で学んだ事をこれからの演劇活動等に生かしていきたいです。

（社会福祉学部 2 年・吉田蓮）

バルーンを使ったインプロ＠大学祭

注

1. アイルランドの作家、詩人、劇作家。代表作に『サロメ』『幸福な王子』など。

参考文献

- Johnstone, Keith, 1979, *Impro: Improvisation and the Theatre*（三輪えり花訳, 2012,『インプロ 自由自在な行動表現』而立書房.）
- Spolin, Viola, 1963, *Improvisation for the Theater*（大野あきひこ訳, 2005,『即興術 シアターゲームによる俳優トレーニング』未來社.）
- 高尾隆・中原淳, 2012,『インプロする組織』三省堂.
- 高尾隆, 2006,『インプロ教育:インプロは創造性を育てるのか?』フィルムアート社.
- 絹川友梨, 2002,『インプロ・ゲーム』晩成書房.
- Lobman, Carrie and Matthew Lundquist, 2007, *Unscripted Learning: Using Improv Activities Across the K-8 Curriculum*（ジャパン・オールスターズ訳, 2016,『インプロをすべての教室へ』 新曜社.）

空海カフェ

担当教員：伊藤 松雄

わたしたちの活動

のどかな日本の原風景として日本最初の国立公園に指定された瀬戸内海地域は、かつては希有な景勝の地として名を馳せていた。しかし、今では山は削られ、海はゴミで汚れてしまっている。この現状は、多くの人々が身近な風景に価値がないとし、安易な開発を容認してきた結果である。はたして、本当に価値がないのだろうか。身近な風景に潜在する自然ならびに文化的価値を再発見し、その意義を見いだすことで、保全の心を育成できる。

崩れゆく身近な環境

本学のある善通寺市をはじめ、香川県は史実として二千年以上の歴史を誇り、瀬戸内の古代都市として栄えてきた。そのため、多くの文化財や文化施設が今に伝えられ、県内の随所に二千年の歴史が刻んだ文化的景観が見られる。すなわち、香川県は上述の問いを実践する上で好適な地と考えられ、私たちが身近な風景の中に埋もれた自然や文化的価値を再発見できるのみでなく、これをまとめて小冊子やリーフレットとして発信することで市民に上述の問いかけをすることができる。

「問」の実践

「問い」を具体化するために、学習のみに留まらず、積極的に発信していく。その際、以下の三点を遂行する。1．テーマの設定：善通寺市や香川県の身近な風景を対象とし、文化を生みだす契機となった自然や自然に埋もれた文化財を探索し、自然と文化の相互作用の観点からそれぞれの成立に関わるテーマを設定する。2．現地体験と理解：具体的なテーマにそって現地に赴き、現状を見聞取材し、その成立について文献を調査する。さらに、テーマの要点を整理し、自然や文化的価値を概観する。3．発信：整理・概観した内容を冊子やパンフレットにまとめ、善通寺市内および県内、県外で配布する。さらに、冊子やパンフレットの配布状況（設置した配布物の減衰）を調査することで、「問」の実践の有効性を把握し、次の活動の反省点として活用する。

1．善通寺市における実践

本年度の善通寺市における活動は、大正レトロをテーマとした。テーマの背景には、大学祭でアニメ「鬼滅の刃」に登場する炭治郎うどんを出店することになったことがある。「あそびの中にも学びをもとめる」という本学の良さを実践する上でも意義があると思われた。炭治郎が生きた大正時代には、明治に導入された西洋文化が大衆にまで行き渡り、地方でもふつうに洋風建築が建てられた。そうした建築物は、令和の現代には懐かしい故郷の風景となっている。明治後半から大正時代に大発展を遂げた善通寺市には、レトロな建物が少なからず残っている。そこで、善通寺市内ならびに高松市内のレトロ風建造物を取材し、「鬼滅巡礼2」と名付けたリーフレットにまとめた。後述のように大学祭において炭治郎うどんとともに発表した。

大学祭ではアニメ「鬼滅の刃」から連想して、大正

レトロをテーマとした建物について考え、うどんを販売した。みんなで何度か集まり建物の写真を撮ったり、うどんの試作をしたりした。その中で仲良くなり、大学祭当日も楽しく活動することができた

（社会学部3年・森瑞穂）

大正レトロをテーマに大学付近にあるレトロを感じられる建物を探し歩いたり、大学祭で「鬼滅の刃」に登場する屋台を再現してうどんを販売した。暑かったので売れるかどうか心配だったが、思っていたより早く売り切れたのでよかった。

（社会学部3年・細田しいな）

市内調査の整理および発表準備

鬼滅巡礼以外にも、昨年度まで取材してきた善通寺市内の五岳山をはじめ、観音寺近隣の七宝山、さらに室戸岬や太龍寺山をふくめた空海の四つの修行の地について「四国遍路のルーツをもとめて」と題した４種類のリーフレットを作製した。これらのリーフレットを高松駅に設置し、その減衰を調査した。その結果、「鬼滅巡礼２」はもっとも売れ行きが良く、このアニメの人気の高さが理解された。

２．香川県における実践

本カフェの活動は二つの活動内容からなる。すなわち、⑴新たなテーマを発掘する活動と⑵大学祭への参加を前提とした活動の二つである。

⑴　新たなテーマを探す活動

昨年度、小豆島で発掘した「鬼滅巡礼１」は、前述のように「鬼滅巡礼２」として発展させることができた。さらに、本年度はメンバーにより提案された「しろとり動物園」をテーマとした。しろとり動物園は東香川市にある私立の動物園で、創設者はサーカスの団員だったという異色の動物園である。まず、何が異色なのか理解するために動物園を訪れた。驚くことに、動物たちは檻の外を歩き回っていた。ここは、動物を見るのではなく、動物と友達になる動物園だったのだ。猛獣も含めた動物たちとの距離は非常に近く、動物に触れ、ご飯を身近にあげられる場所だった。公式リーフレットや公式ホームページでは想像できない現実を目の当たりにして驚くとともに、メンバー全員が動物園の実態を紹介するリーフレットの必要性を感じた。そこで、しろとり動物園のオリジナル・リーフレットを作製することとした。

象の餌やり（上）とひよこの温もり（下）

まず、しろとり動物園に連絡をとり、予め本カフェで取材・作製したリーフレットの原稿についてミーティングをもった。リーフレットのテーマは通常の動物園とは大きく異なる「癒し」とした。コロナ禍の中、多くの人々が心を病む現代にあって、動物たちと

の触れ合いは人間性を取り戻す絶好の機会となる。動物との触れ合いのなかで命の温もりを感じ、食べ物を欲しがる動物に生きることの本質を読み取る機会となることを解説した。これらの点を網羅したリーフレットの原稿を持参し、動物園とのミーティングをもった結果、本カフェの意図に賛同してもらうことができた。空海カフェのオリジナル・リーフレットは高松駅にある本学ブースのみでなく、動物園にも設置してもらう予定である。学生たちは、キットではない本物の企画運営を体験できた。

しろとり動物園でのミーティング

しろとり動物園のリーフレット制作は、大学生活の中でもとても良い経験だった。学生でしろとり動物園のリーフレットを作成し、飼育員の方々と打ち合わせを行うといった活動は、学生だからこそ出来たように思った。だからこそ、就職してからもこの経験を活かし、何事も視野を広げ可能性を見出していきたいと考えている。

（社会学部3年・村田ノエル）

うさぎの温もりとともに記念撮影

⑵　大学祭への参加を含めた活動

先述のように、本年度は炭治郎うどんを提供するテントを運営し、そのバック・テーマとして「大正レトロへの誘い」を設定した。３年生はテント運営に精通していたため、大正レトロを感じる建物への取材に力点をおき、大学祭で発表することとした。

装飾看板の作製風景

また、イベントでの装飾は極めて重要であるため、炭治郎うどんのシーンを描いた立て看板を作製した。

大学祭では、メンバー全員の団結した努力によって盛況のうちにうどんを完売することができた。炭治郎うどん自体は盛況であったが、バック・テーマの大正レトロについては、あまり関心がもたれなかった。賑わいの中でアピールするには、難しいテーマだ

ったのだろう。次の機会では、屋内展示に切り替えつつ発表できるように準備をすすめたい。

大学祭での空海カフェ・テントの風景

３．小冊子とオリジナル・リーフレットの作製・配布

先述のように、本カフェでは、「問」を実践するにあたり、「伝える」ことを重視している。なかでも、紙媒体による伝達は最重要課題の一つである。そこで、本カフェの活動内容はリーフレット等にまとめて学内外で発信している。次年度は7種類の紙媒体、すなわち「四国遍路のルーツをもとめて」と題した四つの空海修行の地「太龍寺山」、「室戸岬」、「五岳山」、「七宝山」ならびに大正レトロ「鬼滅巡礼2」、「善通寺大正レトロ」、さらに癒しの動物園「しろとり動物園」などのオリジナル・リーフレットを発行し、自然と文化への関心を高めるとともに、新たな観光素材を提案、さらに自然保護の心を伝えていく予定である。

2023年度作製・配布するリーフレット

４．オリジナル・リーフレットの配布状況と今後の計画

本カフェが実践してきたリーフレットや冊子の発行による活動発表は、すでに4年経過している。配布場所は、主に高松駅・京都市山科の随心院（善通寺ゆかりの寺院）である。この方法の特徴は以下の通りである。

⑴ 設置するのみで、手渡しや袋入れ渡しは不要であるため、省力的である。

⑵ 定期的に補充しつつ、配布調査が可能である。

京都市山科区にある随心院

また、これまでの結果は以下の通りである。

⑴ 4年間で、のべ3万部以上を配布した。本学のマグノリア・カフェならびに観光学メジャーの存在とその活動を学外で大きくアピールできた。また、リーフレットに対する人々の関心の高さがわかったとともに、この省力的な配布方法の有効性を確認できた。

⑵ コロナ禍でも日本語リーフレットはニーズがあった。

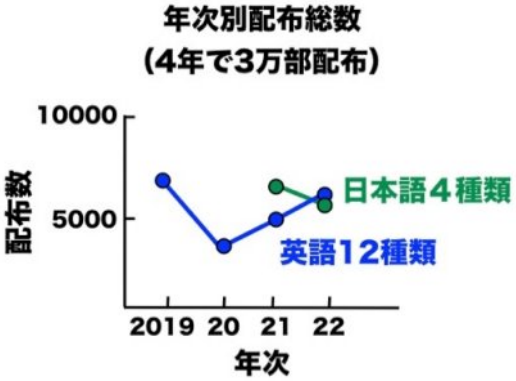
⑶ アニメ系のリーフレットの関心が高かった。

これら以外にも、配布数の季節的推移ならびにコロ

ナ禍における外出制限の影響やその解除に対する反応などが明らかになった。香川県の観光客動態についても貴重なデータが得られた。

次年度は、癒し系のリーフレット「しろとり動物園」が加わるため、このジャンルの社会的なニーズが理解されると思われる。さらにオリジナル・リーフレットのジャンルを増やすことによって、本来の目的である「身近な風景への関心を高める」こと以外にも、社会的な関心の種類や規模をデータで示していくことができる。そこで、今後アニメ系、癒し系、アート系、スポーツ系、科学系などのオリジナル・リーフレットの作製を想定した活動を行っていく予定である。

高松駅におけるリーフレットの減衰



過去4年間の配布状況

ポストモダン教職カフェ

担当教員：森川 由美

活動の理念と２つの問い

20世紀末からのICT・AI化、その後のDX化による技術革新によって人々の生活が変わっていくことから、その変化に即した新学習指導要領が学校に導入された。この学習指導要領は、児童・生徒が学校で学んだことを将来につなぐ「生きる力」を育むことを目的としており、「世紀の大改革」と言われる。これは、近代学校教育からポストモダン学校教育への転換を意味するだろう。しかし、未来の社会で活かせる「生きる力」を育む児童・生徒の学びとはいったいどんなものか、いまのところ明確な答えは見つけられていない。その一方で小中学校においては、2021年度中にGIGAスクール構想による一人一台のタブレット端末配布が終了している。

そこで、本カフェでは学校教員をめざす学生たちが、これからのポストモダン社会の学校において児童・生徒の学びがどうなるかを考えようと、授業におけるICT化に焦点をあて、以下の2点を「問い」として設定した。（1）ポストモダン社会の学校では、児童・生徒の学びをどんな形にしていくのか、（2）児童・生徒の学びへの関わりにおいて、これからの学校教員はこれまでの学校教員と比べてどのように変わるのか（同時に、これまでの学校教員と変わらず大事にされるのは何か）。

活動の報告

これら2つの問いに対して考えるため、学校教育現場に関わる人達との対話や振返り活動を試行錯誤しながら行った。活動は大別すると4つになる。ICTを取り入れたその先にある教育について考える講座、映画『みんなの学校』の鑑賞、不登校特例校について考える講座、そして、大学祭への参加である。以下では4つの活動と学生の感想を紹介する。4つの活動報告の後に、各学生が本カフェの活動を通して見えてきた「2つの問いに対する私たちの考え」を掲載する。

第1回河田先生講座と講座後の歓談（2022年6月24日）

GIGAスクールのなかで教育の本質を考える

本カフェの問いと重なる『GIGAスクールのなかで教育の本質を問う』（2022年）の著者である河田祥司先生（高松市総合教育センター）に講座を開いていただいた。その準備として全員で本書を読み、質問をまとめた。6月24日の回だけでは時間が足らず、11月18日に第2回、そして、2月25日に第3回を行った。

「タブレットを活用するためには基礎的スキルが必要であるため、子どもが日常的に使用しながら少しずつ基礎的スキルを身につけていくことが求められ

る。その上でタブレット使用に関して最低限のルールを設け、子どもと一緒に学びを深めていくことが大切であることが分かった。」（文学部4年・柴田紘奈）

「見せていただいた動画では、グループワークの際に、赤白帽子を使っていた。赤帽子を「たすけて」、白帽子を「できたよ」とすることで児童の理解度を視覚的に確認できていた。白帽子の子が赤帽子の子に教えることもでき、児童間で主体的に協力しながら課題を解決できるような取り組みを行なっていたのがとても参考になった。」　（文学部4年・池川藍霞）

映画「みんなの学校」とインクルーシブ教育

高松市のホール・ソレイユにおいて上映されたドキュメンタリー映画『みんなの学校』（9月16～22日）を鑑賞し、昨今、重要性が強調されるインクルーシブ教育について考えた。

「一人一人の生まれてきた環境、特性に沿ってチーム学校として関わっていたのが心に残った。チーム学校と一言で言っても、今まであまりピンと来なかったが、全員が1人の児童の未来の目指すべき場所を共有しておくことの大切さを知ることができた。」

（文学部4年・池川藍霞）

「私は今まで、教員とは「教える専門家」だと思っていた。しかし、この映画から子どもたちの日常や教員同士の試行錯誤する姿をみて、教える専門家だけではなく、「学びの専門家」になる必要性も感じた。子どもたちは常に変化しながら毎日を過ごしている。いつどんな時でも、子どもたちの変化に気づき、子どもたちと一緒に考え、学び合えるような教員になりたい。」　（文学部4年・藤澤健太）

不登校特例校の実践から学校教育を考える

12月19日には、不登校特例校として本年度開室した大和市立引地台中学校分室の小林勇輝先生から、google meetを使用して遠隔でお話をうかがった。こうした講座の遠隔開催は主宰教員も学生も初めであり、事前にテストは行ったものの、PC電源やカメラや机の位置に関するハプニングがあり、図らずも遠隔開催の準備や段取りが経験できた。

「今の教育現場には「子どもたちが主体的に…」といった文言が多くある。それらが本当に子どもたちは主体的に活動できているかどうかを問い直すいい機会になった。当たり前のようにある学級制度や評価制度、期末テストなど、かえって子どもたちの主体性や「自由」を奪ってしまっているかもと感じた。今ある固定概念や当たり前を一度取り壊し、目の前の子どもたちにあったものに再構築していくことが今後、教員をして行く上で必要な要素だと考える。」

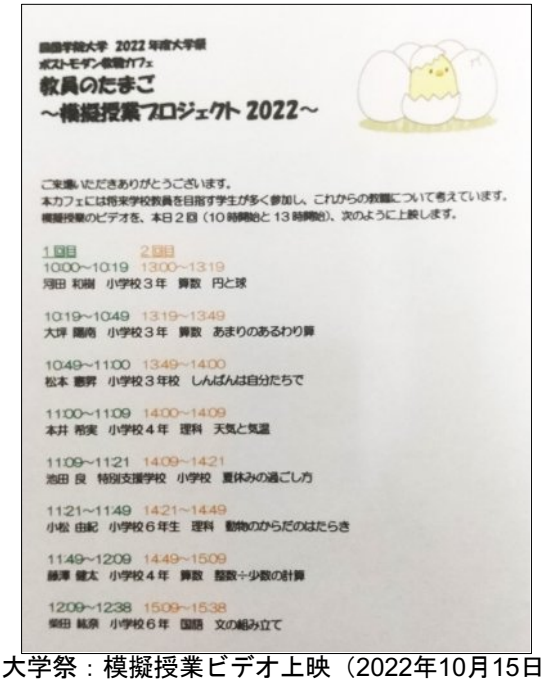
（文学部4年・藤澤健太）

「生徒のやりたいという思いと自己決定を大切にしなければならないと思った。また、生徒と親の願いを聞き、学校の取り組みや児童に対する働きかけを見直したり、進路の相談にのったりすることが大切だと考えた。」　（文学部4年・柴田紘奈）

712教室において遠隔開催した小林先生による講座（2022年12月19日）

教員のたまご～模擬授業プロジェクト2022～

10月15日の大学祭では、「教員のたまご～模擬授業プロジェクト2022～」として、授業の導入部分を中心に行った模擬授業を撮影したビデオを午前と午後に上映した。



聖徳学園大学 2022年度大学祭
ポストモダン教職カフェ
教員のたまご
～模擬授業プロジェクト 2022～

ご来場いただきありがとうございます。
本カフェには将来学校教員を目指す学生が多く参加し、これからの教育について考えています。
模擬授業のビデオを、本日２回（10時開始と13時開始）、次のように上映します。

1回目　2回目
10:00～10:19　13:00～13:19
羽田 和樹　小学校３年　算数　円と球

10:19～10:49　13:19～13:49
大坪 陽南　小学校３年　算数　あまりのあるわり算

10:49～11:00　13:49～14:00
松本 恵野　小学校３年校　しんぱんは自分たちで

11:00～11:09　14:00～14:09
本井 裕実　小学校４年　理科　天気と気温

11:09～11:21　14:09～14:21
池田 良　特別支援学校　小学校　夏休みの過ごし方

11:21～11:49　14:21～14:49
小松 由紀　小学校６年生　理科　動物のからだのはたらき

11:49～12:09　14:49～15:09
藤澤 健太　小学校４年　算数　整数÷少数の計算

12:09～12:38　15:09～15:38
柴田 純奈　小学校６年　国語　文の組み立て

大学祭：模擬授業ビデオ上映（2022年10月15日）

2つの問いに対する私たちの考え

これからの学校での学びにはICTを取り入れて終わるのではなく、ICTを文具として使いながらアナログな部分を残した学びが求められると分かった。今まではただタブレットなどのICTを使って授業をすればいいと思っていたが、ICTは教材ではなく好きな時に児童が使える文具として使えるようになるといいと学んだ。これからの学校教員は様々な場面でICTを使ってみて、アナログな部分が必要な指導とICTを使った方が児童が考えやすいと思える指導の2つを上手く使い分けながらより深い学びに繋げていく必要があるように思う。　（文学部4年・池田良）

ICT教育について、一人一台タブレットや電子黒板等でICTを導入していることは知っていたが、それの使い方や使うタイミング等、実習の際にも迷うことが多くあった。「ICTを文具として」という言葉を聞いて、教師自身がICTを文具として使いこなせる必要があり、そのために児童と共に学び成長していく必要があるとも思った。そのため、これからの学校教育について教師は教えるという立場だけでなく、共に学ぶという考えを持つことも大切だと思った。

（文学部4年・池川藍霞）

ICT を使用しているのは、ごく一部の地域にしか過ぎないと教育実習を経て思っていた。その中で、教員が使えることも大事であるが、児童が使いこなせてこそ意味があることがわかった。また、これまでの教科書に沿った内容や授業形式にICTを取り入れた授業形式を加え、時と場合によって2つを使い分けていく必要がある。そして、教員の在り方に正解を求めず、児童がどうしたいのか、何故そう考えたのかなど児童の意見を捨いながら児童と一緒に授業や学級を作っていくことが大事になっていくと考える。

（文学部3年・大坪陽南）

児童の意見に対して理解するのが難しいと思えば、先生が理解をして言い直しをして終わるのではなく、他の児童に振り、説明をさせる。その事で児童同士で確認ができ、理解できる。さらに新しい意見も出てくるかもしれない。たくさん出てくる意見を受け入れて、「違うことが良しとなる学級づくり」をすることでみんなが認められる学級を作ることができることが分かった。私が小学生の頃は、教科書の内容のみを

教えられていた。しかし、教科書は過去のことしか書かれていない。その内容が現在はどうなっているか調べ、教科書の内容+現在の情報も伝える授業を構成することが大事になってくると分かった。また、教科書などのアナログのみではなく、必要に応じたICTの活用も今後の教育のカギになってくると思った。

（文学部3年・河田和樹）

マグノリア学寮1階スタディラウンジにて河田先生第2回講座の振返りと次回の話合い（2022年11月28日）

ICTを取り入れた教育において、教師は、児童がICT機器を使うことに対して消極的にならないこと、また教師自身がICTを使うことを恐れず、まずは実践し問題点や改善策などを検討しながら向き合っていくことが重要だということを学んだ。さらに児童の意見を豊かに引き出し、それらを価値づけする教師のかかわりや授業での質問の仕方など、これまでと変わらず必要とされる教師のスキルもあるということを学び、これからの教師人生の中で自分の強みに合った指導方法を見つけたいと思った。

（文学部4年・小松由季）

ICTを導入した教育と従来の教育、どちらの良いところも活かすことができるように授業改善を積み重ねていくことが教員にとって必要なことだと考える。教科によって、取り扱う単元によって、児童の実態によってなど、様々な状況に応じてICT機器の適切な活用と学びやすい環境設定ができるように教員も児童とともに学んでいく必要がある。また、現場で一緒に働く教員やICT支援員など多くの方々から様々な知識を学び取り、児童の可能性を広げるために多くの行動ができるようにしたい。（文学部4年・柴田紘奈）

現在の教育現場では、1人1台のタブレット端末の導入が進められており、児童生徒に効率よくかつわかりやすい学習が求められている。効率化を重視しても、児童生徒一人一人に目を向けることを忘れてはいけないと思った。目の前の子どもたちは一人ひとり学習習熟度や学習スピードが異なる。「効率良く」を重視しつつ、目の前の子どもたちに合った教育をしていくことが必要だと思う。また、グローバル化社会である現在、目の前の子どもたち一人ひとりは日々変化しながら日常生活を送っている。そのため日々子どもたちの様子や状況を観察し、子どもたちからも学ぼうとする姿勢を持ち続けることが大切だと思った。学校は子どもたちが主体であり、子どもたちが生き生きと活動できる場所でなければならない。このことを忘れずに、子どもたちの輝ける場を提供できる教員になりたい。　（文学部4年・藤澤健太）

学校教員は、絶対不変ということはあってはならない存在であり、何事にも対応し、進化していく必要がある。児童に対してや教員同士など、学ぶべきところは学び、取捨選択をしながら、自分自身が変わっていくことを当たり前にできるようにする必要があると考える。時代のニーズに応えていくのも求められることではないだろうか。

（文学部3年・松本憲昇）

ICT機器の普及によって、学校現場での教育のありかたが変化しているので、児童に合った教育方法を基盤に新たな方法を考えていく必要がある。教育を受けやすい環境になったからこそ、この時代に適した方法を取り入れることが大切なのだと思った。

（文学部3年・本井希実）

踊ろうぜ

担当教員：阪本 麻郁

活動の理念

SNS の普及によりバーチャルなコミュニケーションが日常化した現代社会は、他者と関わる手段はよりオンライン化され、空間における身体性は日々希薄化している。その速度は、2019 年末から流行した COVID-19 の流行により加速度を増したと言えるのではないだろうか。感染対策という名の元、不要不急の外出は控え、オンライン授業やオンライン会議が日常的に行われ、飲み会をオンラインで行うオンライン飲み会までもが生み出された。2023 年 2 月現在、世界的に COVID-19 の脅威は収束傾向にあり、「グッバイ コロナ」を謳い感染対策を撤廃する国は急増している。しかし日本の現状は、「グッバイ コロナ」とは程遠くマスクを始めとする感染対策がまだ生活に根強く残っている。

この様にオンライン化された生活は身体性がより排除され、マスクが日常化したコミュニケーションは表情や感情を読む事が出来ず、社会生活におけるコミュニケーションを円滑に進める障害になっていると考える。また、身体性と時間と空間の共有もそれらに相まって以前より増して希薄化しているのではないだろうか。そこでマグノリア・カフェ『踊ろうぜ』では、身体性と時間と空間による芸術「ダンス」を軸に学生が主体となり細分化したテーマに取り組み、リサーチやパフォーマンスを通して身体性と空間の共有における再起を図る。コンテンツとしては、以下の通りである。

1. 授業の枠を超え、より「ダンス」に取り組みたい学生にその機会を与える。
2. 学生主体のプロジェクトを進める事で、より学生から主体性を導き出す。
3. 作品作りのプロセスやグループ内でのフィードバックを重ね、経験値を上げる。
4. 学内・学外で公演に取り組み、カフェのメンバーを超えたコミュケーションを生み出す。

活動の報告

本年度は 1 つのプロジェクトを終了し、1 つのプロジェクトが進行中。またもう 1 つのプロジェクトが予定されている。詳細は以下の通りである。

1. 男木島×コンテンポラリーダンス『ただよい眠りツつ』

日時：2022 年 8 月 6 日・7 日 6 回公演
場所：男木島名物倉庫『あいきえん』
演出・振付・出演／関口晴　土田倭也
監修／阪本麻郁

1 年生の関口晴さんが瀬戸内芸術祭で訪れた男木島で「ここで、踊りたい」と思った事から始まったこのプロジェクト。2 年生の土田倭也さんを誘い 2 人で作品作りを始める。学生自身で度々男木島を訪

れ、泊めてもらえる友人に出会ったり、会場となる男木島名物倉庫『あいきえん』のスタッフさんたちと打ち合わせを行ったり、島の自然のリサーチや島民をインタビューしてフィールド・ワークを重ね、それらをダンス作品『ただよい眠りツつ』として公演を行った。

学生の考察①

今回初めて学外での自主公演を行い、様々な観点から学ぶことができた。

まず、男木島でのリサーチを通して歴史や自然、地形、島民について学び、男木島をより私たちの問題として近づけるようにした。特に私が興味深かったのは島民と移住民との問題だ。長期にわたり住み続けている島民と男木島への移住や活動を決意した若者たちとの価値観の違いが存在した。島民は高齢の方が多く、自分の考えを相手に押し付けることが多い。それを移住した若者が上手くあしらいながら、我慢していると私は感じた。また私たちが島民に対して行ったインタビューでは、島民が移住民を全て把握できずに、だんだんと孤立してしまう問題もあった。普段私は観光地として男木島を観ることしかなかったため、この問題に驚いた。

創作の点では、私のダンスに対する考えを改めることができた。今回の公演で私は振付に興味がないと分かった。稽古を重ねる上でどうしても動きが固まってきて、新しい動きを模索することができない。私は常に新鮮な動きを求めるのでそれがストレスなのだと感じた。私の中で振付をして公演をすることに意味はないのだと理解した。今までただ漠然と踊りたいという気持ちがあったが、それがよりクリアになり自分の興味のある動きを知った。

（社会学部 2 年・土田倭也）

学生の考察②

本公演では 7 月から 8 月の上旬にかけて計 12 日間フィールドワークとして男木島へ滞在した。公演期間は 8 月 6 日・7 日の 2 日間に 6:30・11:30・16:00 の時間で上演し、早朝公演では男木島に宿泊しなければ観劇できないという異例の公演であった。今回は、フィールドワークを経て得た男木島での暮らしと問題、そして、作品についての考察を述べていく。

男木島について驚いたのは高齢者の割合だ。島民 153 人のうち、95 人が 65 歳以上である。「現在は超高齢者の方が亡くなり、高齢者が増えていないことでギリギリ島の生活が回っているが、現在の中年層は育児と介護の板挟みで、仕事ができない時もある。そして、現在の中年層が歳を取り、高齢者の数が増え始めた時に島は回らなくなる」と、島の方が話してくれた。現在は、二軒目のパン屋さんや宿泊施設が建設されていたり、家族での移住者が増えたりと前向きな傾向だが、中学校までしかないため高校進学を機に本土へ戻る家族も多い。さらに、観光資源となっている猫も過剰な繁殖による農作物被害のため全頭去勢されており、このままでは近い将来猫がいなくなる。超少子高齢化が進む日本の未来の縮図ともいえる男木島は、現在観光と暮らしの継続の仕方を模索し続けている。

創作については、制作面と作品面の二つの視点から述べる。制作面については至らないことがかなり多かった。最低限のタスクとして、会場の予約・予算書、スケジュール、予約フォーム、仮チラシ作成・宿泊所の確保・本チラシのデザイン依頼と印刷・衣装・概要の書き出しが必要であった。音響・照明は、自然音と光を用いたため必要なかったが、依頼が伴うものには全て打ち合わせがあり、手一杯であった。制作部門を設けずに我々二人で行おうと

したことは一つの反省点である。舞台清掃や当日受付といった島に入ってからのタスクは、会場に併設されているコーヒーショップや演劇コースの先輩が手伝ってくださりなんとかやり遂げることができた。だが、予約ミスや、外に置いていた舞台装置が島民が通る道の邪魔となり本番中に撤去されてしまうといった想定外のトラブルも発生し、本番 3 分前に舞台に駆けつけるといったこともあった。今回の公演を機に、公演を成立させるために裏からサポートをする「制作」という仕事の大きさと重要さを学ぶきっかけとなった。

次に作品面についてである。まず挙げられるのは肉体の疲労だ。身体負荷の高い振付が多く、酷暑が続く中で 1 日 3 回の公演を行ったことにより体力消耗が激しく、昼公演終演時にはお互い熱中症のような症状が出ていた。だが、肉体の限界も超えていた楽日の公演の際に、体内と自然との循環を感じることができた。前へと突き出した腕のエネルギーが自然へ放出され、床を踏み込んだ足を反発するようにくるぶし、ひざを通って丹田へ昇っていき、再び力が循環してもう一度腕を前へ突き出す。踊りはただのエネルギーの解放に留まらず、発した力が再び還り、踊り終わった後も力が湧いているという状態を体験することができた。それは、振付の一部に男木島の伝統的な祭りである獅子舞いの踊りを取り入れていたことと、自然を感じながら過ごす中で「島のからだ」をつくることができたからだろう。そして、循環していく体を島外でも体現することができれば、自分自身と自然だけでなく他者と循環することも可能になるのではないだろうか。そのため、循環するエネルギーについて今後もリサーチしていきたい。

そして、私が本公演を通して得たことは、踊りを通じた新たな関係性やコミュニティの構築である。この作品以外にも「Come and Go ひびのこづえ×島路保武×小野龍一×OGIZIMA」と岡留優個展「scrap and…」という即興パフォーマンスの二つの作品を男木島で行った。その際それぞれに新たな出会いがあり、国外の方とも交流を深めることができた。この経験は非常に嬉しく、踊りを通した新たな関係性の構築に私は興味があるのだと気づいた。また、この関係性は新たな繋がりをつくる。事実、岡留さんとのコラボレーションや、他公演のお誘いは、本公演を通して仲良くなった方の繋がりから来ている。「男木島へまた来なよ」と言ってくれる島民や、活動を応援してくれる人とも出会えた。その繋がりを継続しながら新たな輪をつくっていけるような活動を、マグノリア・カフェを通してこれからも続けていきたい。　　（社会学部 1 年・関口晴）

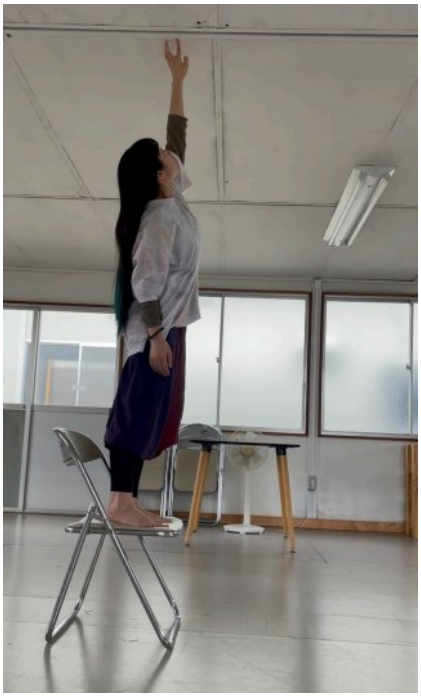
『ただよい眠りツつ』 講演後、男木島『あいきえん』にて

2. ワカモノミニシアター in 松山 『タートル』

日時：2023 年 2 月 11 日・12 日 2 回公演
場所：ケミビル 705 号室
演出・振付／関口晴
出演／福島優菜
監修／阪本麻郁

演劇コースの卒業生で、現在 SIPA（四国学院大学パフォーミング・アーツ研究所）の職員でもある大瀬戸正宗さんが主催し、四国を拠点として舞台芸術分野で活動する若手団体を集め公演する『ワカモノミニシアター in 松山』に声をかけてもらい、1 年生の関口晴さんが演出・振付で 4 年生の福島優菜さんが出演する新作『タートル』を松山で発表する。

関口晴さんと福島優菜さんによるダンス作品『タートル』。システマティックな社会に対するアンチテーゼ、はみ出す身体をテーマにしたソロ・ダンス作品である。まだ公演を終えていないので、稽古風景を紹介する。



新稽古場にて『タートル』の稽古

新稽古場にて衣装ありでの最終調整

3. 学内外でのダンス公演（未定）

マグノリア・カフェは 3 月末日までが活動期間であるため、時間が許せばもう 1 作品の制作と公演を実施したいと考えている。実施が困難な場合は来年度に繰り越して実施する。ともあれ、学生自らが創作意欲と自主性を持ち、ダンスを通して活動する場を 1 年目のマグノリア・カフェ『踊ろうぜ』で試行錯誤出来た事は、授業とはまた一味違い学生・教員共に実りある時間であったと感じている。

学生自らが発案したテーマやモチーフを学生同士が深め、身体による考察でダンス作品を作り出す作業や公演場所を探し、交渉し、公演を準備し、それを観客に観てもらう事で池に石を投げた様な波紋が生まれ、小さなプロジェクトでもより多くの人々と身体と空間を共有出来たのではないだろうか。

おたく♪シンフォニア

担当教員：川又 実

おたく♪シンフォニアのバックグランド

現代、世界共通語になった「おたく（オタク・OTAKU）」。おたくには「お宅」や「ひきこもり」などのイメージを持つが、社会的に認知されつつあり、趣味に没頭、熱中している人を指す。「おたく」を自称し、自分の世界を楽しむ若者も多くいる。つまり彼らは独りになり、心が落ち着くというような状態「個独」を楽しんでいる傾向もあるのではないだろうか。若者のおたく化を学生と一緒に考えていくことは、彼らの人間関係を考えるうえでも、コロナ禍における現代社会への問いかけになるのではないだろうか。

おたく♪シンフォニアが奏でる問い

おたくは未来を救うのか？主宰者はその可能性はないと考える。ただ若者たちと日々接していると、その可能性もあるのではと思うこともある。なぜなのか？これまでのPMカフェ活動（2021年度以前のマグノリア・カフェの名称）でも「メディア」を中心に、そのメッセージや効果、社会や人間関係など、様々な可能性について学生と共に考えてきた。さらにここ数年は「個独」をキーワードに、特に若者の人間関係について学生たちと一緒に考えてきた。ますますメディアがパーソナルに進化していく現代社会において、社会とは無関係に個独を邁進していく「おたく」について考えることは、コロナ禍後に起こるべく社会変動に対し、自己の存在意義、あるいは現代社会の在り方についても一石を投じることができるのではないだろうか。

活動の一コマ

「おたく♪シンフォニア」に参加して

川又先生との出会いは、僕がこの大学に入学する前、オープンキャンパスにて、先生の模擬授業に参加した時だった。そして入学後も、僕のクラスの担任となり、偶然もあるものだと思った。その後、授業やメジャー関係で川又先生とは様々な関わりがあった。

そして今年、「おたく♪シンフォニア」（以下、カフェ）に参加したことで、計 4 年間先生と関わることができ、色々と指導してもらえた。先生曰く、僕のことを「腐れ縁」とおっしゃっていたが、僕にとっては、あまり良く知らない先生よりも、慣れ親しんでいる先生の方が対応しやすかったこともあり、先生で良かったと思っている。

このカフェでは、先生がまず煎りたて、挽きたて、淹れたて珈琲を準備してから活動を始めるため、珈琲の匂いが充満した研究室で、充実したひと時を過ごしながら活動に励むことが出来た。僕以外に 2 人の学生と共に参加し、活動場所は研究室が主であったが、たまにコイノス食堂や学外に行くこともあり、いつもと違った環境で活動を行うことも出来た。

活動のペースは、先生の多忙なスケジュールがあるにも関わらず、月に数回と割と多かったため、こまめに先生に発表報告出来る環境であった。そのため、次までに何をすれば良いかを随時確認することが出来た。12 月からは、個別での指導もあり、集中して活動に取り組むことが出来た。

僕の卒論テーマは、「ポケモン」についてである。活動では、僕はゲームを中心とした「ポケモン」についてしか知らなかったため、研究内容をどうするかを、最後まで思考していた。先生は「ポケモン」のことについては、深くはご存じなかったため、僕の卒論で苦労したかと思う。しかし先生は、ピカチュウについて、もっと深く書くことを提案したり、独自性を出して書いていくことを勧めて下さったりと、卒論を書いていく上のヒントを与えて下さった。そして何より、僕は「ポケモン」が好きな訳ではなく、「ピカチュウ」自体が好きだったことを、この研究を通して思い知らされた。

研究活動は一時期難航したが、先生と過ごした指導期間は無駄ではなかったと思う。研究は、僕が想定していたよりも思いもよらない結果となったかもしれない。その事実を受け止めねばならぬ状況に陥ったものの、ピカチュウがポケモン RPG ゲームや、ポケモン映画において、どのような立ち位置で描かれていたかを知ることが出来た。この研究活動を通して意味を見いだせて良かったと思う。

大学祭では、先生が毎年開店している「カフェ・あなば」の手伝いをし、テントの装飾や、看板作りなどをした。先生は大学祭の前日から、珈琲の豆を煎っていて、珈琲に対する熱量やこだわりを感じた。珈琲は、僕のバイト先の「コ〇ダ珈琲」方法よりも、もっと凝った珈琲の淹れ方をされていた。そのため、他の珈琲店とは違う、コク深いエメラルドマウンテンを提供することが出来た。当時は 10 月の中旬にも関わらず、かなり暑い日だった。そのため、温かい珈琲しか販売していなかったので、売れ行きはそこそこだったものの、自身のバイトの経験も生かして参加することが出来たと思う。

1 年次以来、大学祭に参加していなかったが、今年、珈琲の提供が出来たり、友達や家族も来てくれたため、大学生活最後の大学祭を目一杯楽しむことが出来た。

今回のカフェ活動を通して、色々気付かされたことや、大学祭での体験など、メリハリのある大学生活を楽しむことが出来た。現在も流行っている新型コロナウイルスにより、自粛せざるを得ない状況でありながらも、有意義な時間を過ごすことが出来た。

この春から社会人になるため、将来への不安も拭えないが、最後の大学生活としては、すごく良い思い出となった。4 年間、何もかも中途半端であった僕を指導していただいた先生には、感謝してもしきれない。川又先生、今までありがとうございました。

（社会学部 4 年・松村純希）

「大学祭に感謝！」

私は大学生活で多くの経験ができたと思っている。メジャーに分かれての講義では、教員免許を取得できるよう励んできた。教育実習に行くことで、教師になりたいと強く思えるようになった。当たり前の事ではあるが、単位を落とさず、非常に充実した学びができたと思う。

カフェ活動で一番の思い出は、大学祭に参加したことだ。

大学祭は 1 年の時と、4 年の時に参加をした。1 年生の時は、必修科目での参加だったが、4 年生でまた大学祭に参加するとは思っていなかった。川又先生のカフェ活動で参加することになったが、参加者は

学生 3 名と少なかった。コーヒーとノンアルコールのドリンクを売ることとなった。コーヒーを私は好きではなかったため、作り方も全然わからなかった。ただ、打ち合わせをするときに、コーヒーを飲んでみることとなり、苦手なコーヒーを克服できた。なぜかはわからないが、急にコーヒーを飲めるようになりびっくりした。

当日は 3 人というスタッフの少なさもあり、多くのお客さんが来たときは、慌ててしまうこともあったが、一生懸命作ることで、非常に充実した大学祭を過ごすことができた。

私は勉学だけでなく、大学祭などを通して、多くの人と関わることができ、楽しい大学生活を送れたと思う。個人的にも、大学祭のおかげで飲めるようになったコーヒーを、毎日飲んでいるため、大学祭にはすごく感謝している。（文学部 4 年・山本航）

「お世話になりました・・・（涙）」

この 1 年間、先生のカフェに参加し、色々と活動出来たことに感謝します。時には先生や同僚から、厳しいご指摘などありましたが、少しは打たれ強くなったかなと思います。

活動では、最初は先生とも同僚とも話し合うことは出来ませんでした。しかし、徐々に皆と打ち解けることが出来、最近では思っていることを発言することができるようになりました。これもこのカフェに参加したからだと思います。

川又先生は、この春、何処か遠くへ行ってしまうようですが、くれぐれも体に気をつけて頑張って下さいね。（社会学部 4 年・永田輝）

カフェ総括コメント＆評価：主宰 川又 実

2022 年度も引き続き、猛威を振るうコロナウィルスのなかで、カフェ活動をどうしていくか、毎回試行錯誤の連続であった。特にカフェ活動の中で、活動の中心でもあった「食を共にする」ことや、学外での活動の制限が若干あったりと、なにかと思い通りに活動が出来ないなかで、学生たちと如何にコミュニケーションをとっていくのか、色々と考えさせられた一年でもあった。

昨年度に引き続きカフェ名を「おたく♪シンフォニア」と称したのは、コロナ禍においても、若者へ未来を託す願いからであった。未来を創造していく若者達、つまり「おたく（あなた）」達が、これまでの日常が非日常となる日々において、一緒に共に音を出し合いながら、日常化しつつあるこれからの社会について、一人一人が「言葉」を奏でながら、この日常についてどう考えていくのか、交響曲というシンフォニアの可能性を、少しでも開花させたいという考えからである。

これまでの PM カフェ活動でも「メディア」を中心に、そのメッセージや効果、社会や人間関係など、様々な可能性について学生と共に考えてきた。さらにここ数年は「個独」をキーワードに、特に若者の人間関係について学生たちと一緒に考えてきたうえで、ますますメディアがパーソナルに進化していく現代社会において、社会とは無関係に個独を邁進していく「おたく（あなた・他者）」について、真面目に考えることは、今後に起こるべく社会変動に対し、自己の存在意義、あるいは現代社会の在り方についても一石を投じることができるのではないだろうかと考えたからだ。

「外出制限」「三密回避」など、他者との接触を遮断することが流布された社会になり、皮肉にも「Stay Home」と叫ばれた社会へと変化し、多くの人が何処へでも自由に出かけることが制限された社会で、「引きこもり」とスティグマを押され、その代表例としてあげられていた「おたく」が、お宅に留まり、これま

で通りの生活を送り、そして社会を静観していた。そんな状況下で、思い通りに活動を展開できない多少のストレスもあり、気持ちが凹んでいる学生たちの顔を見ていると、このまま活動を続けていても意味がないのではと脳裏をよぎることもあった。しかし、コロナ禍も含め、計 10 年間、カフェ活動を学生たちと共に行い、思い通りに活動が展開できない制約された活動の中でも、学生たちは積極的に活動に参加してくれたことに感謝したい。

主宰者自身も、コロナ禍の社会で公私共々色々と大変な時もあった。だから、指揮棒を振るうはずの指揮者（主宰者）が、演奏者（学生）をまとめ、上手にシンフォニーが奏でることが、思い通りに実行出来ない状況であったかも知れない。しかし、そんな中でも活動に参加してきた学生たちとコミュニケーションをとる中で、学生たちから前向きでポジティブな考えや柔軟な行動、そして趣味にいたる話まで色々と話すことができ、積極的な活動をすることは、色々と難しい状況下のなかでも、これまでの活動とはひと味違った経験を、彼らを通して実行できたと考える。

最後に、主宰者として毎回試行錯誤の連続ではあったが、本年度の活動でも一番勉強させられていたのは私自身なのかもしれない。この 10 年間様々な学生とカフェ活動を一緒に出来たことに感謝の意を伝えたい。ありがとうございました。そしてサヨウナラ。。。

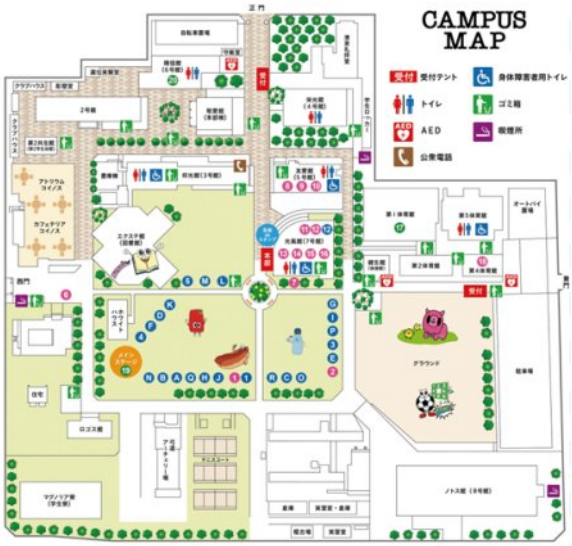
活動の一コマ

付録① マグノリア・カフェ ストール（大学祭）報告

文責：山中 雅大

宴を行う機会としてのストール

マグノリア・カフェの活動の目的の中には、「教員と学生による内発的動機による知的作業を促進する」ことと、饗宴として行う機会や知的作業を通して「包括的かつ知的共同体構築の可能性を探る」といった意図がある。「マグノリア・カフェ ストール」は上記の理由から、本学で開催される大学祭に携わることで、全学あるいは大学祭に参加した人々を対象に、開かれた実践的「学び」の提供と共同体の構築を目論むものとして、各マグノリア・カフェが出店・出展し開催するものである。



2022 年度「ストール」の内容と場所について

カフェ名	主宰者	店名	場所	内容
日韓文化コラボ	李 静淑	韓国映画祭	514教室	イ・ビョンホン 監督「エクストリーム・ジョブ」（2019 韓国）の上映会。
瀬戸芸2022カフェ	井上 雅義	瀬戸芸2022カフェ	711教室	参加学生を代表して大野亜里沙さん（2年生）が約4分の映像を制作。主宰教員（井上）が活動報告を兼ねた映像作品を制作。それら2本を上映。
隣人と自分の命を守る	清水 幸一	清水（幸）マグノリア・カフェ 隣人と自分の命を守る	野外テント	野外力検定、アウトドアチャレンジ。
科学の目でものを見る	鈴木 望 清水 一紘	マグノリア・カフェ 「科学の目でものを見る」	723教室	論理パズル・知恵の輪(難)・ピタゴラ装置。
Reflections on Gathering	福永 健一 ネルソン橋本 ジョシュア諒	マグノリア・カフェ Reflections on Gathering	野外テント	キャンプ風のセットアップで、アメリカ発祥のコーンホールゲームを提供。
珈琲・ホビー・ハウス 第2章 try & error!	山中 雅大	珈琲・ホビー・ハウスカフェ 注文の多そうな肉まーさん （ルーラ、飛ぶぞ!!）	711・721教室	肉巻きおにぎり・飲み物の販売、参加者を巻き込んだゲーム(大乱闘スマッシュブラザーズ、マリオカート)および大会（ゲー専Ⅱ）。
インプロを生きる。	仙石 桂子	マグノリア・カフェ インプロを生きる。	野外上演	インプロ（即興演劇）。
空海カフェ	伊藤 松雄	空海カフェ	野外テント	炭治郎の大正うどん、フレンチ・オゼイユ・スープ。
ポストモダン教職カフェ	森川 由美	教員のたまご ～模擬授業プロジェクト2022～	724教室	カフェの活動を生かして行った模擬授業（各約10分）を撮影したビデオ上映。
踊ろうぜ	阪本 麻郁	マグノリア・カフェ 『踊ろうぜ』	711教室	『ただよい眠りツつ』（男木島×コンテンポラリーダンス）上演会。
おたく♪シンフォニア	川又 実	誰もが幸せになる♡おたく珈琲	野外テント	珈琲・ノンアルコール販売。

1）日韓文化コラボ

「エクストリーム・ジョブ」という韓国映画鑑賞中

2）瀬戸芸 2022 カフェ

2 時間 30 分に渡る上映に延べ 50 名が視聴

３）隣人と自分の命を守る

子供の秘められた力を発見する遊び（野外力検定）紹介

４）科学の目でものを見る

「科学」を用いたピタゴラ装置の展示

５）Reflections on Gathering

アメリカ発祥のコーンホールゲームを提供

６）珈琲・ホビー・ハウス 第２章 try & error!

出店＆出展で店員（学生）もお客さんも大盛況♪

７）インプロを生きる。

会場やお客さんを巻き込んでの即興演劇

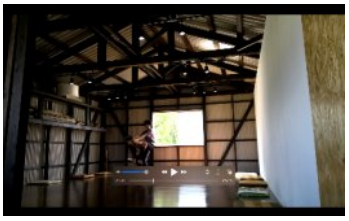
８）空海カフェ

装飾用看板の作成（左）盛況だった炭治郎うどん（右）

９）ポストモダン教職カフェ

8 名の学生が行った模擬授業のビデオ上映

１０）踊ろうぜ



男木島でのダンス公演の記録映像の上映

１１）おたく♪シンフォニア

今年も煎りたて挽きたて淹れたての川又珈琲大好評！

付録② マグノリア・カフェに関する規程〈一部抜粋〉

20 世紀後半から 21 世紀にかけて静かに、しかし確実に、私たちの社会は分水嶺を通過した。消費社会、ポストモダン、ノンモダン、後期近代、再帰的近代、リスク社会、リキッド・モダニティ、ポスト工業化、情報化、ニューエコノミー、ポスト資本主義、知識社会等、視点によってさまざまな切り口や多少の時期設定の違いはあるものの、近代化の象徴であった重工業と少品種大量生産を中心とする、20 世紀の産業社会がこれまでとは異質なものに変容したことは衆目の認めるところだろう。

社会がポスト産業社会へと変貌すると同時に、私たちはこれまでとはまったく異なった諸問題に直面することになった。そのため、これまで妥当性をもっていた学問の理論枠組みや概念装置では、新たに発生した問題を分析したり、解決したりすることができなくなった。つまり、従来の学問・科学は新たな問題に直面して、自らの限界に向きあわざるをえなくなったのだ。学問・科学には今日、根本的な自己変容が迫られている。

本学のリベラル・アーツ教育は、キリスト教主義を基盤に据えながら社会をより善いものに変革し、「自分と他者たちの希望と幸せ」を見いだすことのできる、見識ある人間の育成を目標としている。大学では、新たな形で展開されるべきアクチュアルな問いが発せられ、ラディカルな知的営為が機軸に据えられなくてはならない。

マグノリア・カフェは、課外活動として正規カリキュラムを補強しながら、現代社会に「問いを発見」して「適切な問い方」（問題構制＝パラダイム）を模索する時空を、本学キャンパスに実現しようとする試みである。また、この試みには、西欧発の伝統的手法を採用する。食事を交えての知のコミュニケーション、すなわち会食仲間の形成だ。かつて、古代ギリシャでは、パーティで飲食をともにして知の対話がなされた。シンポジウム＝饗宴の場である。マグノリア・カフェは、四国学院大学版シンポジウムである。

目的

本学の課外活動としてマグノリア・カフェを全学的プログラムとして展開する。その目的は、次の通りである。

1）現代社会を単に自明性のもとに捉えることを越えて、私たちの社会的現実に種々の問いを発見する。

2）教員と学生による内発的動機による知的作業を促進する。

3）学問をシンポジウム＝饗宴として行う機会、すなわち飲食の場を含む知的作業を通して、包括的かつ知的共同体構築の可能性を探る。

4）マグノリア学寮でのアカデミック活動の一環として、同学寮の理念である Living Learning Commune の構築に貢献する。

カフェ・カテゴリー

マグノリア・カフェは、以下の 3 カテゴリーで展開する。

1）A

i. テーマは、明確に近代社会あるいは現代社会への批判的視点を含む。

ii. 1 人の専任教員あるいは特例教員 B が、本学正規学生（最低 5 名）と共に実施する。

iii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で 1 回、そして、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

2）B

i. テーマは、実存的あるいは社会的問いを含む。

ii. 一人以上の専任教員あるいは特例教員 B が、本学正規学生（最低 3 名）と共に実施する。

iii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で 1 回、そして、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

3）共同教育研究

i. 同年度の 2 つ以上のマグノリア・カフェによる合同特別プログラム教育研究として実施する。

ii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で 1 回、又は、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

VOS ESTIS SAL TERRAE

SHIKOKU GAKUIN
UNIVERSITY

FOUNDED IN
1949

MARE vol. 2